
オリ主と剣製の麻帆良日記

スメラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリ主と剣製の麻帆良日記

【Nコード】

N2845J

【作者名】

スメラギ

【あらすじ】

主人公棚町 たなまちやこ 京は病気で死んだ。しかし、学校に行きたいという願いにより能力付き+αでネギま！の世界に復活する。棚町の運命は・・・そしてあの男も・・・*この作品は主人公最強&TS&ご都合主義&作者の文才最悪&不定期更新&原作名多数載せておきながら原作キャラ出すのはネギま！とFateのみです。一つでも苦手な要素がありましたらご遠慮下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿&処女作品です。

また、作者は文才最悪なのにオリ主とクロスオーバーを一緒にするつもりです。

ですのでとても酷い作品になると思います。

また原作名を多数書きましたが原作キャラは（一部除いて）出しません。

それでもいいという方はご覧下さい。

しつこいですが不定期更新です。

プロローグ

俺の名前は棚町 京。歳は18。性別は男（これ重要）。
趣味はアニメ、ゲーム、二次創作の執筆。
世間一般でいうオタクだ。

そんな俺はいま、病院のベッドの上で死にそうになっている。
理由は、末期のガン症状によるもので、なんとか意識を保っている
状態である。

そのベッドを囲むように、数人の親戚の人たちと、友人が泣きなが
ら俺を見ている。

（ちなみに両親は事故で亡くなっている）
何を言っているのかあまり聞こえないけど、とりあえず俺を心配し
ているらしい。

嬉しいなあ。

こんなに心配してくれるなんて。
けどごめん。もう無理だわ。

—— だんだん意識が遠のいていく。

ああ、短い人生だったなあ。

…心残りなのは、今読んでいる漫画の結末を知らないことと、執筆
中の二次創作を完結することなく死ぬことかなあ。

ネギまとかブリーチとかいろいろ。あとあの作品のRPG、やりた
かったなあ。

あと、できれば…

——学校、行きたかったなあ——

病気による入院を、中学一年の頃からずっとしていたため、学校に行けなかった。

そのため、ずっと学校に行きたいと思っていた。

けど、その願いは叶うことはなかった。

もう限界だ。保っていた意識が無くなっていく。

——さようなら…みんな——

そして俺は死んだ。この世界に未練を残して…

「ならばその願い、叶えてあげよう」

s i d e エヴァ

「ああ、暇だ」

今、私は自分の家でボーっとしている。

これが満月の夜であれば桜通りで吸血することができるが、そうではないためすることがなくただボーっとしている。

ここに話し相手がいれば変わってくるのだが、ここにいるのは命令に忠実なロボットと、うざい人形という、話し相手にはならない奴しかない。

といっても話をしたいと思う人間はこの学園にはいないけどな。

「なにか起こらないものか」

起こったら起こったで後始末がめんどくさいが、一時の暇つぶしにはなるため、ただ無駄に時間を浪費するより遥かにマシだ。
まあ、そんな都合よく起きる訳がないのだが…

「暇つぶしに散歩でもするか」

と思って椅子から立ち上がろうとしたそのとき、

——家の外から強い魔力反応を感じた。

そして同時に強い風と光が発生した。

「な、なんだこの反応は！？」

信じられないぐらいの魔力の嵐が外で起きている。

中からその様子を見ようと思ったが、眩しくて見る事ができなかった。

仕方ないため確認のために外に出ようとしたが、風の影響で扉を開けることができなかった。

「くそ！！！！どういことだこれは！！こんな魔法見たことがないぞ
！茶々丸！！！」

「ダメです、マスター。」

この現象についてまほネットで検索しましたが当てはまる魔法はありません」

「なんだと！！！」

茶々丸が検索しても当てはまらない魔法だと！！

つまり、それは私が使っている魔法とは違う魔法だということだ。
現に長く生きてきた私でさえ見たことが無い物だ。
とするとこれはなんだ？

あれこれ考えていると、謎の嵐は徐々に弱まっていた。
そして、嵐はなくなりもとの静けさに戻っていた。

「…一体なんだったんだ？今は」

「わかりません。外に出てみますか？」

「…行ってみよう」

そう言って扉を開けると

——人間が寝ていた…

「…どういうことだ？」

「分かりませんが、少なくとも生きています」

「それは見ていれば分かる。…あの嵐は転移系の魔法なのか？」

「おそらくそうでしょう」

しかし、この状況はどう見てもおかしい。
転移なら転移先で寝るなんてありえないし、何よりあの嵐。
ただの転移で、あんな嵐が出るなど聞いたことがない。

「…謎だ…」

そのとき電話が鳴った。

「ん？電話？…なんだじじいか…」

『もしもしエヴァかの。おぬしの家の前からものすごい反応が観測されたのじゃが、どういふことかの？』

「あれは私にもよくわからん。とりあえず言えることは、あの反応の後、一人寝た状態で現れた」

『寝ているじゃと？』

「ああ」

『ふむ。とりあえず侵入者として、ワシの部屋に運んでもらえんかのう？』

「…いいだろう。今から行けばいいのだな？」

『よろしく頼むわい』

全く、めんどくさいことこの上ない。
だが…

「いい暇つぶしにはなるな。いくぞ茶々丸」

「はい。マスター」

茶々丸に運ばせながらじじいの所に向かった。

——このとき、私は思いもしなかった。

まさかこの出会いが私、そしてあの男の運命を変えることになろう
とは……

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？感想、誤字・脱字等のご指摘お待ちしております。

神からの贈り物（前書き）

大変遅くなりまして申し訳ございません。

最低でも三週間に一つは投稿できるように頑張りたいと思います。

あと、まだ一話しか投稿してないのにお気に入りに十九人も登録してくれてありがとうございます！！

ご期待に応えられるかどうか不安で一杯ですが精一杯頑張って投稿したいとおもいます。

神からの贈り物

S i d e エヴァ

- 学園長室 -

「入るぞジジイ」

「失礼します」

私は家の前に（恐らく）転送されてきた侵入者をジジイのところに運んだ。

こういうことは（めんどくさいが）こいつのところに運ぶのが一番いいだろう。

「ご苦労じゃったのう、茶々丸君にエヴァよ」

「ふん、別に。暇だったから運んだだけだ」

「フォッフォッ、素直じゃないのう」

…めんどくさい…
いちいち反応するのもめんどくさいから放っておこう。
それより、疑問に思ったことを聞こう。

「そんなことより、他の先生や生徒はどうした？あれくらいの魔法なら生徒でも気付くだろう」

そう、いまここにいるのは私と茶々丸とジジイだけだ。
この場にタカミチすらないのはいったいどういうことだ？

「どうやらあの魔法に気付いたのはワシだけらしいのじゃ。
現に、タカミチ君からはなんの連絡もないしのう」

「なんだと？」

あのタカミチすら感知することができないほどの高位転送魔法…
…わからない。全くわからない。

「とりあえずタカミチ君には連絡しておいたぞい。あまり人が多くても駄目だしのう」

「それがいいだろう。」

これでもしこの世界の魔法の定義を覆すようなものと判明した

「らめんどくさい事になるしな」

まあ、ありえないとは思うが万が一のことがあるかもしれん。
用心に越した事はないだろう。

…それにしても、

「こいつは一体何者なんだ？」

私が見たことも聞いたこともない魔法でいきなり現れ、現れたと思
ったら寝ているし、拳句の果てにあの魔法に気付いたのがジジイだ
けときた。

…謎だ…

「とりあえず侵入者についてはタカミチ君が来てからと起きるまで
待つとしようかの」

「…考えてもわからないならそれしかないだろうな」

事実、いくら考えても答えがでないしな。

「すみません。遅くなりました」

ジジイと話していたらタカミチがやってきた。

「構わんよ。まだ起きとらんしのう」

「それで、その人が例の…」

「そうじゃ。まだ起きておらんからどういう理由でここに転送されたかわかんが少なくとも侵入者ではなかるうよ」

と先程話していたことをタカミチに報告していると

「…ん、ふあ…あれ？ここは…」

寝ていた人間が起きた。

side 棚町

…何か話し声が聞こえる。
おかしいな。俺死んだはずなのに…

目が開けれそう。
とりあえず起きてみよう。

「…ん、ふぁ…あれ？ここは…」

起きてみるとそこは入院している病院の病室ではなかった。
強いて言うならどこかの学校の校長室を大きくしたような部屋だった。

その中にあるソファ―に俺は寝ていた。
なぜに？

「起きたかのう」

声が聞こえたのでその方向に体を向けると…

「…なんでさ？」

あまりの驚きに某正義の味方の口癖が出てしまった。
そこにいたのは四人。

しかもその四人は俺が二次創作を執筆しているときに大変お世話になったあのネギまの登場人物ではないか！！
なにがなんなのか全くわからない…

「混乱する気持ちはよく分かるのじゃがとりあえずおぬしの名前を知りたいのじゃが…」

落ち着け、俺。

とりあえず俺がこの人たちを知っていても相手は俺のことを知らない。

だからまず名前を言おう。

とりあえずそう考えて一旦頭を冷やそう。

「…ふう。失礼しました。私の名前は棚町 京です」

「棚町君、早速本題に入るのじゃがおぬし、ここに来た目的は何かわかるかのう?」

「いえ、全く分かりません。

現に私もなぜこのような場所にいるのかわからなくて少し混乱していますのすいませんが分かりません」

私?なぜに一人称が私に?

…まあ、どうでもいいか。

「ふむ、いつの間にかここにいたと。それを証明できるかのう?」

「証明と言われましても…寝ていたら勝手にここにいたみたいですので」

少し嘘を言った。

死んだのに生きていたと言っても多分というか絶対信じてもらえないだろうし。

「どう思う？タカミチ君」

「多分嘘は言っていないと思います。起きてからの行動が少しおかしかったので」

「ああ。起きて周りをキョロキョロ見て、尚且つ私たちを見たときの困惑というか驚きというか。

一連の行動を考えると明らかに混乱しているときの行動だな」

すっげえ警戒してる。

まあ、当然だろう。

夜に正体不明の侵入者がいたら警戒するのは当たり前のことだよな。あれ？ポケットの中に何か入ってる…

「？どうした、お前」

神だって……！なんで？！意味が判らん……！

「どういふことかのう。棚町君」

「いやいや……！私にも神との関係なんて知りませんよ……！
ていうか、こんな手紙のやり取りができるほどの関係があったらあ
んな人生ってあ……」

「あんな人生？」

言ってて虚しくなった。

本当はそう思っていたけど口に出さないように頑張って生きてきた
のに。

「……いえ、何でもありません。とりあえずこれを」

「ふむ、わしが受けとるのがよいじゃろう」

持っていた手紙を学園長に渡した。
すると突然手紙が光だした。

「「「「「な!!!」」」」」

そして、床に魔方阵らしきものがでるところから白い僧侶らしき服を着た中年の男性が現れた。

「ふう。やはりこの世界のマナはすばらしいな」

「おぬしは？まさか神なのか？」

「いかにも。私は神だ。

ただ、本来この世界に存在しない者だからあまり長い間居られない可哀想な神だがな」

「うわあ、本物の神だあ。（棒読み）

すごいなあ。（棒読み）

来て欲しい時にはいくら願っても現れないくせにいまさら出てきてもなあ…

「とりあえず、棚町」

「…なにか？」

めちゃくちゃ理不尽なこの状況に不満を感じている俺に何か言おう
としてるので体を神の方向に向けた。
その時、

神が俺に向かって頭を下げた。

「…え？」

「すまない。こんなことをしてもただの自己満足でしかないのは重
々承知している。

ただ、せめて君の願いだけは叶えてあげようと思ったんだ。
怒るなら遠慮なく怒ってくれ。君にはその権利がある。」

「…」

神のやった行動、発言に驚きを隠せない俺。

そして、言っている意味が理解できない四人はどう反応すればいい
か分からないでいた。

「近衛門」

「な、なんじゃ？」

「あなたに頼みたいことがある」

「頼みたいことじゃと?」

そして、神は俺が言う前に言った。

「柵町を学校に通わせてくれないか?」

「何じゃと?」

「!!!!!!」

俺は今、とんでもないことを聞いた。
学校に通わせてくれ?
ということは本当に…

「本当に、叶えてくれるの?」

「ああ、せめての罪滅ぼしだ」

ああ、願いが。願いが神にとどいた。
願っても願っても叶うことがなかった夢が…
学校に行きたいという夢が、叶う…

「う…ぐっ…えぐ…うわああん…！」

ダメだ。止めれない。止めることができない。
嬉しすぎて涙が止まらない…

「こ、これはいったいどういうことじゃ？」

「ああ、説明しよう」

side エヴァ

どういうことだ？

これまでの流れを見て考えるとこいつの願いは学校に行くことらしい。

しかし、こいつの容姿はどう見ても高校生くらいにしか見えない。
姿だけを見るなら高校に通っているようにしかみえない。

そんな奴が学校に行けるのが泣くほど嬉しい？

…分からない。

学校に行きたくない私にとって理解できない。

「こ、これはいったいどういうことじゃ？」

やはりジジイも、いや、神とこいつ二人を除いた四人全員理解できてないだろうな。

代表してジジイが質問した。

「ああ、説明しよう。ただ、時間がないから詳しい説明は省かしてもらおう」

まあ、そうなるだろう。

神は時間制限でこの場にいるからな。

今は無理だが後々本人に確認すればいいしな。

「ぶっちゃけると柵町は見た目は高校生くらいに見えるが、実際のところ中学校にすら行っていない」

「なんじゃと!?!」 「なっ!?!」 「どういうことです!?!」
「...!!」

「勉強は独学だがなんとか高校卒業レベルまではある。
しかし、重い病気によって入、退院を繰り返していたため学校に

行くことができなかった」

「なんと…」 「そんな…」 「…」 「…」

「そんな生活を繰り返す内に棚町は寝る前に神様、つまり私にこう願うようになった。

『学校に行かせてください』

と。その願いは確かに届いていた。けど、叶えてあげることではできなかった」

「なぜですか？」

「人間はそれぞれ決められた人生を歩む。

確かに、人間は必ずしも決められた人生を歩むとは限らん。けど、それは自分で死ぬほど努力して成功した人間か、何かに巻き込まれてしまった人間のどちらかだ。

いすれにせよ、神自らが介入して人生を変えることはできないんだ」

「…」 「なるほどのう…」 「それは…」

まあ、そうだろうな。

自分の能力を使って世界を救ったナギや、人間の勝手な思いで吸血鬼になった私が当てはまるな。

「だから、私は言い方は悪いと思うが柵町が死ぬのを待っていた。死んだら決められた人生から外れようやく介入することができるからだ」

「なるほどのう。だからさきほど自己満足と言っておったのか」

確かにこれは自己満足だろうな。

こいつは生きている間に叶えて欲しかっただろう。そう考えれば自己満足だな。

「そういうことだ。さて、時間がないのもう一度確認させてもらおう。」

近衛門よ。柵町を学校に通らせてもらえないか？」

「うむ。そのような理由があるならよいじやろう。のう、タカミチ君」

「ええ。人としてここは許可するべきです」

私はどうでもいいがな。

「感謝する。それで、もう一つ頼みたいことがある」

「なんじゃ？」

「実はこちらの世界に転生させる時に少々体をいじくったのだ。そしたら柵町にある特殊能力が使えるようになった」

「どういう能力ですか？」

「『想像を力に変える能力』だ」

「……はい？」
「ぐす、……え？」

なんだその能力。
チートではないか。

「柵町は入院をしている間漫画や小説、アニメなどの設定などを元に小説を執筆していたんだ。

文庫に表すと二十冊以上。

執筆している内にそれぞれの原作の設定や能力などを覚えていく

ようになっ たんだ。

魔法の世界に関わるから生きていけるように覚えたことを有効活用できるようにとつけたんだ」

間違っ てはいない。

ただの人間が生きていけるほど甘くないからな。
だからといってチート能力をつけていいとは限らんがな。

「それは、つまり使い道を誤らないように監視をして欲しいと？」

「いや、確かに監視もして欲しいのだが少し違う。

私が言いたいのは

――誰かで指導して欲しい。正しく能力が使えるように」

「なるほど。つまり、こいつが能力を使いこなせるように修行場所と指導者が必要だと」

「そうだ。あまりに強すぎるゆえ完全に使いこなせることができない。

模擬戦の相手として指導者が必要なのだ」

確かに、いきなり目覚めた能力を100%使いこなせるはずがない。
なら一人で何とかするよりも誰かが相手をしてもらって戦いながら慣れたほうがいいだろう。

「指導者のう。しかし、これはここにいる四人の中でということじやろつ?」

「ああ。できれば事情を知っているほうがいいな。

そちらも、誰かに最初から全部説明するのはめんどいだろう」

む?さてよ?この中の四人?

まず茶々丸は論外だ。

次にジジイも自分の地位を考えて無理だ。

次にタカミチ。こいつは『悠久の風』に入っているため出張という名目で海外に出る。

指導できる時間などあるはずがない。無理だ。
ということは…

「「「「じーーーーー」」」」

「私か…」

私しかない。

めんどいと言えばめんどい。

しかし、さきほど私は何を思っていた?
家で何をしていた?

ここでNoと言えばまたそこに戻る。

けど、ここでY e sと言えは…

「…まあ、暇つぶしにはなるだろう」

「ほ、やってくれるかのうエヴァ」

「どうせ暇だしな。」

墮落した生活を送るぐらいなら指導者になるのもいいだろう」

それにこいつの能力も気になるしな。

「決まったな。ふう、よかった。」

これでいいか？ 柵町」

「…ええ。本当に、十分すぎるくらい。」

ありがとう、神様。私の願いを叶えてくれて」

「そう言ってもらえて嬉しいぞ。」

君もようやく報われたな」

と話していると神の体が薄くなり始めた。

「む。どうやら限界が来たらしいな。
それでは近衛門よ。棚町のことをよろしく頼む」

「うむ。任せよう」

「棚町よ。さきほど体をいじくったと言ったがそれにより君の体は
それだけでも充分強い。
能力を使うか使わないかは君自身が決めろ」

「ええ、わかったわ」

「それでは帰るとしよう。
さらばだ」

そう言つて神は消えた。
さて、後は…

side 棚町

神が消えた。
短い時間だったけど俺にとって人生の分岐点なぐらい重要な出来事
だった。

「さて、棚町君。おぬしは学校に学校に行きたいかのう?。」

「はい、ぜひお願いします」

「うむ。ではタカミチ君のクラスでよいかのう」

「そうですね。そのほうが都合がいいでしょう」

「ということは2 - Aか。」

「...? あれ?」

「すみません。女子校ですか?」

「そうじゃよ。別によいじやろ。だっておぬし、

女の子ではないかのう?。」

「は? え? ちょっとまって!

え? まさか...

「体が女になってる――！！！！」

「今頃気付いたか。
口調で気づけよ」

「ていうか男だったの！？」

最悪だ…

なんで？ってあれ？ポケットの中にまだ何か入ってる…

「あれ？また手紙…」

手紙が入っていたので読んでみた。

『ついでに体を女にしておいた。
そのほうが都合もいいだろう。
よかったな！』

b y 神』

「よくないわよ！！」

あの野郎！！俺が気にしていたことを現実にしやがって！！

確かに名前が女っぽいから体も女にならないかなとは思ってたけどそれは願いの中に入っていないし！！
いらんことをしやがってえー！！！！

「次会ったらボッコボコにしてやるわ！！」

「ドンマイじゃな」

「はは…」

「自業自得だ」

「ご愁傷さまです」

「とりあえず2 - Aは決定と。
次は住む場所じゃが…」

「私の家でいいだろう。そのほうがやりやすいしな」

エヴァの家かあ。

やったぜ！！ずっとエヴァの近くにいられる！！

「警備については…どうする？ 棚町君」

「できればやりたいのですが、まずは自分の能力を理解したいと思います」

「ほ、やってくれるのかのう？」

「ええ。実践経験を積みたいですし。
なにより、守れる力があるのですから使わないわけにはいきませ
ん」

「ふむ、わかった。では能力を把握できたらいつでも言ってくれ。
警備のシフトに入れるようにするわい」

「ありがとうございます」

こんな俺のために真剣に考えてくれた四人のために恩を返すのが本
当の理由なのだけど恥ずかしいから言わない。

「そんなところかのう。それじゃ棚町君」

「はい」

「これからよろしく頼むわい」

「はい。よろしく願いします」

「頼んだぞい。エヴァ」

「ふん、まあいいだろう」

これから始まる初めての中学校生活。
私は胸を踊らせながらエヴァについていった。

神からの贈り物（後書き）

このような駄文に最後まで読んでくれてありがとうございます。

盛り上がるような場面もなくただこれからのためのつながりのような感じになってしまいました。

さらに駄目押しにご都合主義全開でむちゃくちゃすぎる・・・
だめですねえ・・・ほんと。

感想お待ちしております。

主従（前書き）

更新が遅くて申し訳ございません。

言い訳をしますと受験やら引越しやらで忙しくて遅くなりました。

・・・本当にすいません・・・

・・・まさか二話投稿してユニークが七千、登録人数が四十人突破するとは思いませんでした^^；

本当にありがとうございます！！

更新は相変わらず遅いですが頑張っていきたいと思います。

追記 レールガンの弾の速さを変えました。

心眼（偽）を直感に変えました。

一部分の戦闘の内容を変えました。

主従

今、俺たち三人はエヴァを先頭にエヴァの家に向かっている。
時刻は夜の十時過ぎ。（茶々丸に聞いた）
そんな夜遅く、

「イエーイー。アハハハハ！！！」

俺は大声で奇声を上げていた。
今、とってもテンション上がってるーーー！！

「はしゃぐな！今何時だと思ってるー！！」

「え？夜の十時でしょ？」

「わかってるなら騒ぐなー！！」

まあ、確かに騒ぎすぎだとは思っけど別にいいんじゃない？

「だって願いが叶ったのよ。
しかも久しぶりの外の空気が吸えて気持ちいいのよ。
とっても最高だわー！！」

ちなみに約二年ぶり。

ずっと消毒液の臭いに囲まれていたら普通はしゃぐだろ。
しかも、

「しかもこんなに体を動かしても大丈夫な体なんてほんとに久しぶりなのよ。

年数で言うなら五年。

はしゃがないほうがおかしいわ!」

そう。中一の頃から走るとか充分に体を動かすことをしたことがない。

さらに高一の頃になると歩くことすらできなかった。

だから今、歩いているだけでもとても嬉しいことなのだ。

「そ、そうか。わかった。

わかったからはしゃぐのだけはやめてくれ。

せめて家に着いてからにしてくれ」

「うっ。

・・・わかったわ。我慢する」

まあ、常識で考えたら俺のやっていたことはただの変態にしか見えないよな。

・・・少し抑えよう。

「わかってくれたならいい」

そういうとエヴァは前を向いた。

俺はエヴァの後ろ姿をじつと見た。

外見はただのどこにでもいる金髪幼女にしか見えない。

けど歩き方や喋り方、そしてにじみ出ているオーラというか雰囲気
が普通の人間とは全く違うのがわかる。

これが六百年以上生きてきた吸血鬼か・・・

俺はその吸血鬼のところにこれからお世話になる。

しかも指導もしてくれる。

これは凄い幸運なことではないか！！

「ああ、楽しみだなあ」

「何がだ？」

「これからの生活」

「ふん、まあおまえはそう思うだろうな。
着いたぞ」

「ここかぁ・・・」

着いた先は原作と同じの木で作られたログハウスだった。

例えるなら山の中にひっそりと建っている木のペンションみたいな感じかな？

林に囲まれていてかなり雰囲気よかった。

「どうした？」

「いえ。ただ、物凄くいい雰囲気な家だなと思って。

木の匂いが最高だわ。私こういう家に住んでみたかったのよ」

「そうか。気に入ってもらえてなによりだ」

そう言うときエヴァは家の中に入った。

俺も茶々丸と一緒に中に入った。

中はとても整理されていて綺麗な感じだった。

と、同時に所々人形が置いてあってとても女の子っぽい感じだった。

「・・・へえ」

「なんだ、その反応は？」

「いえ、別に。

・・・ただ、人形がたくさんあってファンシーだなと思ってね」

「な!!」

思ったことをそのまま口にしたことに反応してエヴァが顔を紅らめた。

「わ、私は人形使いだぞ!!」

そんな私が人形を持っていて何が悪い!!」

「そういう意味で言ったわけではないわ。

ただ、可愛い人形がたくさんあるから女の子らしいなあと」

「なっ!!!!」

さらに思ったことを言い返したらエヴァの顔がトマトのようにならに紅くなった。

やべえ・・・すごく可愛い・・・

「ふ、ふん!!なら別にいいだろう。

それよりもだ!!」

あ、話そらした。

「おまえは今から一緒に別荘に来てもらう。
早速おまえの能力見せてもらうぞ」

「もう?」

「実際にどんなものか見てみないと指導できないだろう」

「確かにそうね」

どんな感じの能力かわからない状態では教えることもできないし俺もわからないからだめだろう。

だったらさっさと確認しようということだろう。

まあ、俺もどんな感じなのか早く確認してみたいからいいだろう。
というか断る理由もないしな。

「いいわ。

けど、別荘ってどこ?」

知ってるけどね。

けど、俺は知っていてもエヴァは俺が知っていることを知らないから聞かないといけないだろう。

「地下にある。付いて来い」

と言ってエヴァは地下に向かって行った。
俺も付いて行くのだがその前に・・・

「茶々丸。ちょっといい？」

「なんですか？棚町さん」

「さっきのエヴァの顔、保存してくれないかしら？」

「わかりました」

さっきの顔は最高だったからな。
あれは永久に保存するべきだね。

「オイ。ソコノ女ハ誰ダ？」

地下に着いたら変な声が聞こえた。

声のした方向に顔を向けると棚の上に座っている人形がいた。

「チャチャゼロ。こいつはこれからここで指導することになった棚町京だ。」

これからおまえを連れて別荘でする」

「オ、久シブリニ体ヲ動力セルノカ。
ソイツヲ切り刻ンデモイイノカ？」

「それはまた今度にしてくれ。棚町、こいつの名前はチャチャゼロだ。」

私の最古の従者にして性格が狂っている人形だ。
主にナイフの使い方や近接戦闘の指導をする」

「性格が狂ってるって・・・
どんな感じに？」

「とりあえず切り刻みたいらしい」

「オイオイ、マスターニ言ワレタクハネエゼ。
マスターダメ」

「おまえは黙ってる!!」

うわ・・・横暴だ（笑）

「とりあえず私についてこい!!」

チャチャゼロの口を塞ぎながら言ってきたのでとりあえず付いて行った。

「うわぁ・・・すごい・・・」

さっきまでいた地下室から変わって南国の小島に聳え立つ塔の頂上にいた。

ただ、防護柵というかそういうものがなくてとても怖い。

例えると東京タワーの展望台のところにいるのに床はあるけどガラスと天井がない感じ。

高所恐怖症の俺にとっても怖い。

「・・・すごいね、エヴァ」

「?どうした、・・・まさかおまえ高s y」なんでもないわ!! 気にしないでエヴァ!!」
わ、わかった」

今の俺の状況を見てそれ以上このことには突っ込まなかった。
けど、気付かれたから後々このことでいじられるんだろうなあ・・・
まあ、俺の場合軽いから慣れれば大丈夫だろう。
多分・・・

「さて、早速おまえの能力を見せてもらおうか。確か『想像を力に変える能力』だったか?
名前どつりならおまえにとって力になる能力をイメージしてみろ。
それで発動するはずだ」

「イメージねえ・・・」

自分が考えたオリジナル能力もいいけど、最初は好きなキャラが使っていた能力を使ってみようかな。
好きなキャラ・・・よしあれにしよう。

「超電磁砲かしら・・・」
レールガン

「レールガン?」

「コインある？」

「って自分で用意すればいいか」

適当にコインを思い浮かべて右手に出すように念じる。

すると右手の手のひらにコインが出てきた。

適当に念じたから絵柄は付いてないけど重量感の本物だ。

「何もないところからコインが・・・
能力だけでなく物質も出せるのか」

「測定完了。絵柄は付いていませんが重さは普通の重さです」

「オイオイ、マジカヨ。
物二困ンネエジヤネエカ」

エヴァは考えるような顔をし、茶々丸は測定結果を（少し驚くような感じで）淡白に報告し、チャチャゼロは今起きたことに驚いていた。

「まあ、そういう能力だし。
それじゃ、やってみるわ」

そうして頭を切り替える。

思い描くは学園都市第三位”御坂美琴”『超電磁砲』（レールガン）。

それをイメージする。

すると、体に電気を帯びるようになった。

電気を帯びているのを感じながら右手にあるコインをコイントスするときと同じようにコインをおき、コインに電気を集めるようになる。

アニメでも聞いたことがある電気の音を感じながら指で弾いてコインを水平に飛ばすようにしながら発射する！！

雷が落ちた時のような爆裂音を出しながら発射したレールガンは目で捉えきれないほどの速さで発射され、それにより強烈な衝撃波が発生した。

それにより地面は抉れた。

「・・・なんだ、今は」

「電気を帯びた弾丸。

電気を利用した物だから通常の弾丸より数倍も速く、威力も強烈なほどに強いわ」

「つまり、元は電気的能力でその電気を利用して弾丸を発射するということか。」

茶々丸、今の測定結果は？」

「弾丸の速さは約マツハ五。威力は中級魔法以上。また、魔力反応は一切ありませんでした」

「雷の暴風かそれ以上の威力でその速さ。更に魔力反応はないから物理攻撃用の障壁でなければならない」

「恐らく魔法使いはこの攻撃を魔法と認識して魔法障壁で防御すると思います。」

「しかしこの攻撃は先程言ったように物理障壁で防御しなければいけません」

52

「それで防御することができずやられると。
・・・おかしいだろ」

ちなみに補足としてアスナの魔法無力化も効かない。
理由は簡単。魔法や気の攻撃ではないから。

と今はまだエヴァはアスナの能力は知らないから言えないけどね。

「あとこの能力、本物の雷出せるから」

原作では雷を出して周辺一帯を停電させていたから多分出せると思

う。

説明して気付いたけどあの作品の超能力ほとんどチートだろ。
ま、別にいいか。この能力自体チートだし。

「しかし、たとえおまえの能力が強くてもおまえ自身が弱くては意味ないだろ。

見た感じ戦ったことないような感じだしな」

「うつ」

確かに俺は喧嘩すらしたことがないくらいの弱さだよ。

「けど、戦闘のイメージトレーニングはしていたよ!!」

「それも重要だが一番大事なのは経験したかどうかだ。
経験がなければ相手の攻撃の予測が立てれないだろ」

「うつ・・・」

なんか俺自身なくしてきたなあ。
大丈夫なのだろうか・・・

「まあ、そこら辺は指導と警備によってなんとかなるだろう」

・・・？まてよ。

これって俺の能力で何とかなるかもしれない。

「ねえ、エヴァ」

「なんだ？」

「一回模擬戦してみない？」

「何故だ？今のおまえでは戦いにすらならんぞ」

「そこら辺は能力でなんとかカバーするわ」

「おまえの能力か・・・」

「試す価値はありそうだな。わかった」

よし。後は準備する時間をくれたら大丈夫だ。

「とりあえず少し準備してもいいかしら？」

「別に構わんぞ」

「ありがとう」

このまま戦っても負けるのは確かだ。しかし、それは俺の能力を使えば何とかなる。

『想像を力に変える能力』。

この能力は俺が想像した能力が使える。つまり原作キャラが持っていたスキルも使うことが出来るのではないのだろうか。例えばセイバーが持っていた『直感』。

戦闘時、つねに自身にとつて最適な展開を感じ取る能力。

一言でいうと未来予知というスキルだ。

それを使えばなんとかなるかもしれない。

・・・やってみよう。

能力はセイバーのスキルである『直感』。

あとは臨機応変に能力を使うとしよう。

「準備できたわよ」

「できたか。とりあえずどのくらいできるかを見るための模擬戦だ。私とおまえの一对一でやるぞ」

「わかったわ」

よかった。これでもし原作どつりに三対一みたいなことになったら戦いにすらならないだろうな。

多分いつか（というか絶対）やるんだろうなあ。

と考えている内に周りの空気が変わった。

と同時に『直感』によって体が自然と構えをとった。

「では・・・いくぞ!!」

と言つると同時に氷柱のようなものがエヴァの周りに出現した。

多分魔法の矢で間違いないだろう。

数は二十。すべて俺を狙っている。

「まずは小手調べだ。

これぐらいはなんとしろよ」

と言つてすべての氷の矢を放った。

どうするかを考える前にスキルのおかげで結論が出た。

まず電撃で前方の矢以外を破壊。

ガラスが割れるような音をしながら破壊した氷の矢を耳で確認しながら前方の矢は先程レールガンを放ったことでできた瓦礫の岩を風で集め、防壁のようにし矢を防いだ。

「やるな。」

だがそれで終わ리と思うなよ」

防いだと思つたら後ろからエヴァの声が聞こえた。けど・・・

「その行動はもう読んでいたわ」

「なっ！！」

瞬動でエヴァの背後をとつた。

そのまま右手に溜めていた電撃をエヴァに放つた。

「ぐっ！！」

エヴァは咄嗟に障壁で防いだ。

が片手で防ぐのは厳しいのか顔が少し歪んでいた。

俺はそれに追い討ちを掛けるために先程と同じように風を使って防壁代わりにしていた岩を引き寄せてエヴァに当てるようにした。

「ちっ！」

さすがにまずいと思つたのかエヴァは瞬動で横に逃げた。

俺もエヴァに当てるはずだった岩を避けるために瞬動で避けた。そしてまた最初と同じように相對するようになった。

「・・・いったいどんな能力を使えばここまで動けるのだ？」

「それはまあ、そういう能力だし。

日頃のイメージトレーニングが実を結んだのでしょう。

だって『想像を力に変える能力』よ。だったらピッタリじゃない」

半分本当で半分嘘。

本当はあのスキルを言ったほうがいいけど説明するのがめんどくさい。

というか今そんな余裕ない。

後で言えばいいでしょ。

「・・・確かにそう考えたら納得いくな。

イメージしたことを力に変えるのならそういうことも可能か」

現にエヴァも信じてくれたし。

今はこれでいいでしょ。

「さて、では再開しようか」

「そうね。じゃあ今度は私からいくわ」

俺はまず左手で風を操って岩を集めた。

集めた岩を風を纏った右手で思いっきり殴った。

拳に当たらない岩もあるが右手に纏ってある風によりさながら散弾銃の如く散らばりながらエヴァに向かっていった。

集めた岩の内三分の二はエヴァに向かっていったが残りエヴァに当たることなく地面に当たった。

そして肝心のエヴァに向かった岩は

「ふん、その程度の攻撃。

これで充分だ」

右手で障壁を作ったことで当たることはなかった。

防御した後エヴァはそのまま攻撃しようとしたができなかった。

先ほどまでいた場所に俺がいない。

そのように見えているはずだ。

俺はエヴァに岩が当たった瞬間瞬動で近くに移動したのだ。

エヴァが俺に気付く前に電撃を込めた右ストレートをエヴァの横腹にぶち込む！！

「中々の攻撃方法だ。

がしかしまだ甘いぞ棚町」

がしかし攻撃が当たる前にエヴァは一步後ろに下がり俺のパンチを避

けた。

そしてから空きになった腹にエヴァは魔力を込めた左の拳を思いつきりぶち込んできた。

しかしスキルによって何とか読めた俺は左手でエヴァの拳を防いだ。俺は吹っ飛ばないようにするために体を反時計回りに捻った。

ここで右手で攻撃することもできるが相手は合気道をマスターした吸血鬼。

恐らく受け流しながらカウンターしてくるはずだから瞬動でその場から逃げた。

「いい判断だ。

そこでもし右手で攻撃していたその瞬間おまえの負けは決定していただろう」

やっぱり。よかったあ。

このスキルやべえな。素人の俺がここまで戦えるって普通はありえないだろ。

まあ、それでも全然勝てる気がしないけどね。

「どうした？それで終わりか？」

「そんなわけないでしょ？これからよ」

「ふ、そうか。」

では続きといこうか」

「ええ、それじゃ」

「いく(ぞ)(わよ)!!」

・五分後・

「はあ、はあ、まだまだね」

「・・・手加減しているとはいえ戦闘未経験者が私相手にここまでやるとは。」

正直驚いているぞ」

結局あの後色々と攻撃を仕掛けたがそれら全て避けられたり受け止められたりされて一発も当てることなく負けた。

さすがに戦闘経験ゼロの俺ではここまでが限界だろうな。

「しかし、おまえの能力なら風や電気以外も出せるだろう。何故出さなかった？」

「だってまだどのくらいの能力が出せるのかわからないのよ。
能力を使おうとしたら実は出せませんでしたでは話にならないで
しょ？」

「む、確かにそうだな。」

しかし二つの能力でここまでとは・・・使いこなせれば封印前の
私ぐらいにはなるかもしれん」

「ないない。今の私では無理よ」

「今の、か。謙虚に見えて実は狙っているのか？」

「そりゃあね。それくらい強くなることができれば狙うべきでし
よ。」

けど今の私では無理だから無難にそう答えたわけ」

これからはエヴァが指導してくれるからいけると思う。多分。

「そうか・・・」

これからおまえは私の教えを請う。と同時におまえは私の従者にな
る。

それでいいか？」

「ええ。いいわよ」

「即答って・・・」

言った後だが本当にそれでいいのか？私の従者になるのだぞ。私
はこの世界では悪の魔法使いだぞ。

その従者になるといふのがどれだけのことがわかっているのか？
後悔はしないのか？」

とエヴァは言っているのだが恐らく俺の回答をすべて信じていない
のだろう。

なにせ約六百年生きてきた吸血鬼だ。

何度も裏切りされたりされてきた経験を持っているからなのだろう。
どうせおまえもそう言っただけで裏切るのだろうと思っただろう。
多分。

俺はエヴァの顔を真剣に見つめながら

「聞く必要はないわ。これからお世話になるのだから結局従者にな
るのと変わりはないと思うわ。」

それにエヴァンジェリンの従者になったからと言って後悔はしな
いわ。

悪の魔法使い？そんなのこの世界に來たばかりの人間にとって関
係のない肩書きだわ。

たったの数時間しか話したり模擬戦したりしたけど悪だとは全く
感じなかったわよ。

そんな人が悪の魔法使いと言ってもねえ」

「しかし!!」

「それに」

「？」

「こんな見ず知らずの、しかもこの世界の人間とは全く違う私を指導してくるんだもの。」

「あなたはとっても優しい魔法使いだわ」

「!!!」

エヴァは俺の話を聞いて愕然とした。

今話したことは嘘偽りのない俺の本心だ。

ていうか、原作読んでいて思っていたことだけどエヴァは絶対悪の魔法使いではない。

もし仮に悪の魔法使いなら十五年も中学生を続けているはずがない。今までこんな生活をした腹いせに一般人を襲ったりするだろう。

そういう行動をするのが世間一般に広がっている悪の魔法使いがすることだろう。

無限に続く中学生生活を送りながらひっそりと暮らしているエヴァを未だに悪だと言っている魔法使いの連中こそが悪だと思う。

だから俺は少しでもエヴァの支えになりたい。

たとえエヴァがいらんとっても俺はずっと支え続けたい。
ならエヴァの従者になってもいいと思う。

「・・・おまえみたいな奴が学園にいたらよかったなあ」

「今出会えたでしょ？ならそれでいいじゃない。
出会えたこれからを楽しみましょうよ」

「・・・そうだな。今出会えたからそれで充分だな」

「これからよろしくね。
マスター エヴァ。」

「ああ、これからよろしくな。
従者 棚町いや、京」

とても慈愛のある笑顔で俺を呼ぶエヴァ。
原作では見たことがない笑顔だった。
この笑顔が消えないように、またこの関係が崩れないようにエヴァ
の従者として頑張っていこう。
俺は心に誓った・・・

「マスターの従者が増えるのはよろしいのですが、ここまで空気に
しなくてもよろしいのではないのでしょうか・・・」

「ココマデ空気ニスルナラココニ連レテクル必要ナカッタンジャネ
エカ？」

主従（後書き）

文章の書き方がへたくそで申し訳ございません・・・

戦闘シーンですが別に面倒だったから短くしようと思ったわけでは
ありません^^；

ただこれ以上長くするのはどうかと思いこのようにしました。
本当に申し訳ございません。

感想お待ちしております。

斬魄刀、そして『家族』（前書き）

ああ、痛い…

先日自転車で二人乗りしていたら後輪に左足が引っ掛かってしまいました。

しかも踵近くに怪我をしました。幸い皮膚と血管を切っただけですが四針縫う大怪我をしてしまいました。

更新が遅れた最大の理由です。

毎回毎回言い訳をして申し訳ございません。

そしてこの作品、なんとユニークが一万を越えました。本当にありがとうございます！！

これからも頑張って更新していきたいと思えます！！

斬魄刀、そして『家族』

ここはどこだ？

今、俺は士郎が使っていた固有結界の荒野のようなところにいる。なぜ？

状況を確認しよう。

エヴァとの模擬戦の後いろいろな技を使ったり説明したりで時間がつぶれた。

最初、体の使い方や技の出し方がぎこちなかったがエヴァの指導の元なんとか自然にできるようになった。

別荘から出た後エヴァの許可をとってふかふかのベットに寝た。けどすぐに寝れずイメージトレーニングをした。

やっているうちに眠くなってきたので寝た。

寝たはずなのに…

「ここはどこだ？」

と独り言を言ってみた。

ま、誰も反応するはずがないけど

「ここは私の世界よ」

って返事がきた！！

とりあえず声が出た方向に体を向けてみると

「ようこそ、棚町京」

めっさ俺好みの女性がいた。

例えると大河内の顔で目を釣り目にして髪を下ろしているような感じだ。

見て思ったのが人間ではないことだ。

エヴァと同じように見た目は人間に見えて何か特殊な生き物なのだろう。

「そうよ。私は人間ではないわ」

なんか心が読まれてる。

「これからあなたの武器になる存在ですもの。
それくらいどうってことないわ」

「武器になる存在？それはいったいどういうことだ？
ていうかなんで俺男口調？」

「ここは私の世界であると同時に精神世界でもある。
あなたの外の体は女であるけど心は男よ。
だから今の姿は男なのよ」

「なるほど。」

で？あなたの正体はなんだ？」

「そうね。けど時間がないから名前だけ言っわ。
どうせ起きたらわかるでしょうし」

？いったいどういうことなのだろう。

「いい、よく聞きなさい。
私の名前は”紅蓮”よ」

「紅蓮？」

「そうよ。」

ではまた今度会いましょう。我が主」

美人さんがそういうと世界が崩れ俺の意識がなくなった。

「ん…んあ…あれ？」

気が付くと俺は起きていた。

どうやら俺は現実世界に戻ってこれたようだ。

「さっきのはいったいなんだっだろう？」

…てあれ？」

どういふことか頭の中で整理しようとしたらベットの近くに日本刀らしき物が鞘に納められながら置いてあった。

しかもその刀から不思議な力を感じる…

まさか…

「これってもしかして斬魄刀？」

確かに俺はエヴァの前であの作品の力を使った。

けど斬魄刀のことについては何も思っていないはず…

…なぜ？

俺は周りを見渡すと金色の紙が置いてあった。

金色の紙ってまた？

「なぜにまた？」

俺は神からの手紙だと確信し読んでみた。

『棚町へ

この斬魄刀は君へのプレゼントだ。

理由はまあ気分だ。気にするな。

とりあえず始解はできるようにしておいた。

卍解は君次第だ。

頑張りたまえ。

追伸 あともう一つ君にプレゼントするつもりだからそのつもりで
by 神』

斬魄刀をプレゼントとかなんかなんでもありだな。

さすが神。

ていうかこのままだと俺ホントに最強になるな。

それともう一つプレゼントってなんだろう？

コンコン

「京、おまえの部屋から何か変な気を感じるのだが…」

考えていたらエヴァがやって来た。

そりゃ来るでしょ。

自分の家から変な気を感じたらおかしいと思うか。

「ああ、何でもないわ。
その説明もするから下に行ってて」

「わかった」

俺はとりあえず斬魄刀を持って下に降りた。
はあ…説明めんどい。

「おはよう。エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ」

「おはようございます。京さん」

「オウ、ナンカ面白ソウナ武器持ッテンジャネエカ」

「ああ、おはよう。
で？その刀はなんだ？」

俺はとりあえずエヴァと茶々丸とチャチャゼロに挨拶した。

茶々丸は朝ご飯を作っているため俺の方に顔を向けずに挨拶をしてチャチャゼロはエヴァが封印されているため動くことはできないがエヴァと一緒に斬魄刀に興味を示していた。

「これは斬魄刀という刀よ。

といっても普通の刀ではないわ」

「どういうことだ？」

「簡単にいうと自我を持っているわ」

「なに！！武器が意思を持っているだと！！」

「ええ。そして意思を持った斬魄刀自らが名前を教えてもらうことによって名前を知ることができるわ」

「ということはこの刀から教えてもらえない限り名前を知ることができないのか。

なんとめんどくさい武器だな」

「ケケケ、コリヤアオモシレエ。

ホントオマエハナンデモアリダナ」

ちなみに細かい説明をするつもりはない。
まあ、相手から聞いてきたら細かく説明はするけど。
あの手紙の内容だと気まぐれでプレゼンしたはずだから虚などではないだろう。多分。

「あと、この刀は神からのプレゼントよ」

「なに！！昨日でたあの偽善者か！！」

「そうよ。証拠にほら。金色の手紙」

「…ほんと何でも有りだな。これ以上こいつを強くしてどうする。それにもう一つプレゼントって…」

「さあ？能力と武器をプレゼントしたから次は…従者？」

「…ありえないと言い切れないのが怖いな」

そう、ありえないと言い切れないのだ。
能力、武器ときて次に戦闘系のプレゼントときたら従者しかない。
まさかサーヴァント？いや、ないだろう。

「まあ、考えても仕方ないわ。
とりあえず……」

「とりあえず?」

「朝食食べましょ? せっかく茶々丸が作ってくれたんだから。
冷めないうちに食べましょ」

「…はあ、まあいいだろう」

エヴァと話している間に朝食が作り終わり、更にテーブルに並べ終えている。
ここまで準備されているんだ。さっさと食べよう。
と思っていたらおかしなことに気付いた。

「あれ?」

「どうした? 食べないのか?」

「ねえ、茶々丸」

「はい、何でしょうか。京さん」

「なんで食べないの？」

「「は？」」

と茶々丸とエヴァと一緒に返事をした。
あれ？俺何か可笑しいと言ったわけ？

「あ、あの京さん。私はガイドノイド。世間一般でいうロボットです。」

ですので食べる必要はありません」

「けど食べることはできるのよね？」

「え、ええ。一応食べることはできますが…」

「なら一緒に食べましょう。」

ちよっと待ってて。茶々丸の分私がつてくるから」

「し、しかし」

「なぜそこまで茶々丸を入れたがる？」

と茶々丸が困惑しているとエヴァが変わりに本元の疑問を質問してきた。

なぜかって？そりゃあ

「エヴァと私は従者とマスターの関係でもあると同時に家族でしょ？
ならエヴァの従者である茶々丸は同じように家族だわ。
同じ家族なら皆で一緒に食べることはおかしいことではないでしょ？」

「……」 「ふ、そうか」 「ケケケ！！コイツハ面白レエ！！」

そういうと茶々丸は驚きで固まり、エヴァは諦めというか認めたというかなんとも微妙な顔をしていて、チャチャゼロは爆笑していた。

「おまえの考えはわかった。
茶々丸。一緒に食え」

「ですが…」

「こいつはこついう奴だ。
諦める」

「…はい。わかりました」

茶々丸はまだ困惑しながらも椅子に座ってくれた。
さーて、作るとしますかな。

side 茶々丸

正直に言っ て困りました。

私は生まれて二年。マスターの従者として生まれました。
ですので京さんに家族だと言われても意味が判りませんでした。
でも…

「さ、できたわよ。茶々丸」

家族のためにということで作ってもらえた朝食を見ると心が温まるような気がしました。

「皆で言いましょ。食べる前の挨拶を」

「たまにはいいだろう。
茶々丸も言っただぞ」

私が食べるのを賛成したマスターは最初はよくわからない顔をしていましたが今では少し顔が緩んでいました。
食事の時、いやそれ以外のときでも見たことの無いような顔をしていました。

「わかりました。マスター」

ああ、これが…

「「「いただきます」」」

これが『家族』というものでしょうか…

斬魄刀、そして『家族』（後書き）

本当は2・Aと合流しようと思いましたがそれだと長くなりそうなのでここで止めました。

あとなんか色々と申し訳ございません…

例の人物はあと四話くらい先に出せたらと思います。

2 - A (前書き)

更新が遅くて大変申し訳ございません。

理由は最近買ったPS3のソフトをやりこんでしまい書く時間がありありませんでした。

本当にすいませんでした。

来月の初旬にノートパソコンが手に入るのでそれで少しは速くなると思います。

あとこんな作者が書くこの小説が登録者百人を越えました！！登録してくれた皆様、本当にありがとうございます！！

できる限り速く更新ができるよう頑張りたいとおもいます。

追伸 怪我はなんとか歩けるくらいには治りました。

2 - A

とても幸せな朝食を食った後俺は茶々丸の片付けを手伝おうと思った。

しかし茶々丸とエヴァがそれを止めた。

「もうそろそろ学校に行く準備をしないと間に合いません。

私とマスターは制服に着替えていますので大丈夫ですが京さんはまだ着替えています」

「おまえは学校に行きたいんだろ？

朝食の片付けをして遅れるのは嫌だろ？」

と言われ俺は渋々止めた。

ただ俺はここで一つ疑問に思った。

「私の制服ってないよね？」

「ああ、それなら大丈夫だ」

なぜ？と質問する前にインターホンがなった。

「郵便ですね」

「あのジジイがこういうことで遅く行動するはずがないからな」

なるほど。

俺はこのあと学園長に会ってそのときに貰うのかと思ったけど。

まあ、直接貰ってもどこで着替えろって話になるけどね。

「予想通り京さん宛てですね」

「ありがとう。茶々丸。

部屋に戻って着替えてくるわ」

俺の代わりに受け取ってくれた茶々丸にお礼を言って着替えるために自分の部屋に戻った。

箱を開けると制服と何故か知らないけど白い下着が入っていた。
なぜ？

「まあ着替えたかったから別にいいけどね」

服を脱いで制服を着てみた。

途中下着のサイズが合っていることに驚いたりどうやって着るのかわからなくて時間がかかったがなんとか着替えることができた。

スカートだからすっごい足がスースーするけど慣れれば大丈夫だろ。
慣れたくないけどね…

「どう？似合ってる？」

「ああ、なかなか似合ってるぞ」

「とても似合ってますよ、京さん」

よかった。

ていうか今の俺、自分で言うのもなんだけどすっごい俺好み。

顔は大河内に似ていて目は釣り目で深い青色のロン毛で身長や体の形は大河内とほぼ一緒。

ああ、これが自分じゃなかったらよかったのに。
ていうかほとんど大河内じゃね？

「あのジジイの所にいくぞ」

「呼ばれたの？」

「おまえが着替えている間にな。
恐らくおまえに渡す物があるからだろう」

確かに教科書も何もないまま授業を受けても意味ないしな。

「わかったわ。」

それじゃ、行きましょうか」

学校に向かう途中で誰かに会おうのかと思ったけど誰にも会うことなく着いてしまった。

多分エヴァ自身クラスメイトに会いたくないから会わない道を通っていたのだろう。

「失礼します」 「入るぞジジイ」

扉をノックしてそれぞれの挨拶で入った。
入ると学園長とタカミチがいた。

「おはよう。」

「うむ、よく似合っておるぞ」

「ありがとうございます」

「さて、棚町君。今日から登校するわけじゃが、どうかな？」

「ええ、とりあえず早く行きたいですね。とても楽しみにしてます」

「うむ。そう思ってくれると嬉しい限りじゃ」

「それで、用件は何でしょうか？」

「うむ、昨日能力を確認したと思うのじゃがどうじゃった？」

「そうですね、百パーセント使えることはできませんがなんとか使うことはできますね」

「なるほどのう。」

「エヴァはどう思ったかのう？」

「現時点ではタカミチといい勝負ができるぐらいだ。」

能力を使いこなすことができれば封印前の私と同じぐらいかそれ以上だろうな」

「ほう…能力を使いこなせないでタカミチ君レベルかのう。
素晴らしいもんじゃ」

いやいや、そんなに強くないから。

確かに負けない。

アクセラレータ

『一方通行』の能力を使えば攻撃は当たらなくなるし、それどころか撥ね返すからな。

ただ戦闘経験がなくまだ魔法が使えない今の状態では勝つのは厳しいだろう。

「それでのう、いきなりで悪いのじゃが夜の警備を手伝ってくれぬかのう？」

警備か…

経験を積むにはもってこいだけど…

「どう？エヴァ」

「別に構わん。おまえの為にもなるしな」

「わかったわ。
やります」

「そうか。それじゃあ悪いがわしらも棚町君の力を見てみたいので
な。」

今日の夜十時に世界樹広場前に来てもらえないかのう?。」

恐らく模擬戦をやるという意味だろう。
相手は恐らくタカミチだと思う。
行く前に別荘で少し鍛えようっと。

「わかりました」

「あとエヴァよ」

「なんだ?ジジイ」

「程々に、のう」

「…ちっ
」

多分桜通りのことだと思う。

満月の時にしかできないから十月現在からやらないと力が足りないと思う。

「先に教室に行ってくる。

また後でな、京」

「失礼しました」

もう話すこともないと決めたエヴァは茶々丸を連れて学園長室を出た。

先程予鈴が鳴ったのでそろそろ行かないと行けないだろう。

「それじゃ、僕らも行こうか」

「はい」

「棚町君」

「はい？」

「お主がこれからの人生楽しく幸せだと感じられることを願ってる。」

こちらもお願ひすることはあるかもしれんが、変わりにお主の願ひも聞く。

その願ひのためならわしは存分に協力するぞい。以上じゃ」

「…はい!!」

学園長の話が心に響く。

ここまで俺のことを思ってくれた人は両親と友達を除いていなかった。

だから余計嬉しく感じた。

学園長から話を聞いて俺とタカミチは2・Aに向かっていた。

「さっきの学園長の話、僕もそう思っているから。」

何か困ったことがあったら相談してね。担任としても話を聞くから」

「ありがとうございます。高畑先生」

「どういたしまして。」

…さて着いたか」

2 - Aの教室の前。

教室の外にいるのに話し声が聞こえる。

原作通りとっても元気な人達だな。

「すごく元気な人達ですね」

「まあ、元気が取り柄だからね。ちょっと待ってて。紹介するとき呼ぶから」

「わかりました」

いよいよだ。

俺は今、猛烈に緊張している。

これがまだ男女共学の学校ならまだいいのだがここは女子中。

相手がすべて女子の中で自己紹介するのは当たり前だがしたことがない。

だからなにをしたらどう反応されるのか検討もつかない。

ああ、やばい。まじでやばい。

「入ってもいいよ」

キターーーーーー!!

とりあえず深呼吸をして、タカミチが開けてくれた扉をくぐった。
そして教壇の前にきて俺は平常心を保つように言った。

「今日から2 - Aに転入することになりました棚町京です。
どうぞよろしくお願いします」

・
・
・
・
・

え？何この沈黙。

俺、別に滑るようなギャグを言った覚えはないのだが…

『き…』

「き？」

『綺麗！！！』

…はい？

「どこから来たの?!」

「なんでこの時期に?!」

「身長はいくつ?!」

などなど一斉に質問されて答えたくても答えられない状況になった。
これが女子中学生のパワーかぁー…
やっていけるだろうか？

「はい、皆ストップ!!」

皆で一斉に質問したら答えられないでしょ。ここは報道部所属の
私が代表して聞くわ」

と、ここでパパラッチがこの状況を打破してくれた。

「高畑先生。よろしいですか？」

「まあ、最初の授業は僕の授業だから別に構わないよ」

「ありがとうございます!!」

ええ〜

一時間ずつとかよ…

まあ、別にいいけどさ。

「私の名前は朝倉和美です。

どうぞ、よろしくおねがいします。 棚町さん」

「お手柔らかに」

「出身地は？」

「山口県」

「なぜこの時期に転校を？」

「この学園長からお呼び出しがありましたので」

嘘だけだね。

悪いけどここは学園長をつかわせてもらう。
普通なら信じないけど大丈夫だろう。

「ああ、なるほどね…」

現にパパラッチが励ましの目で俺を見てるからね。

「好きな食べ物と嫌いな食べ物は？」

「好きなものは納豆。
嫌いなものはチョコレートかな」

ええー！！なんで？！などなど。
悪いな！！チョコレートは大っ嫌いなんだよ。

「趣味は？」

「趣味は執筆とゲームね」

「執筆？何を書いているの？」

「ファンタジー小説を少々」

別に間違っではない。
ジャンルはファンタジーだからね。

「へえー。」

あ、忘れてた。身長と体重は？あとできればバストサイズも」

これってタカミチの前で言っているのだろうか？
別に俺は構わないけどさ…

タカミチの方を向くとタカミチは耳栓をしていた。
さすが英国紳士。（なのかな？）
そこら辺はわかっていたね。

「身長は167くらいで体重は…まあ秘密ということで。
バストはDくらいかな」

おおおお！！

体重はぶつちやけこの状態で測ったことがないからわからない。
バストは下着に書いてあった。

「なるほどね。ちなみにいまどこに住んでいるの？」

「後ろでニヤニヤしてる金髪の人」

「え？ってエヴァンジェリンさん！！」

「私を巻き込むな…」

だって質問に答えるときに笑っているのがむかつくんだもん。

「次はぶっちゃけ好きなタイプは？」

キタ！！

質問内容で一番して欲しくない質問だ。

ここで男の時と同じことを言ったら同性愛者になるし、かといって男の好きなところを答えるのは無理。

だって俺ゲイやホモじゃねえし。

「ククク…」

エヴァは俺の本当の性別を知っているから必死に笑いを堪えている。

「ははは…」

タカミチも知っているためか遠い目をしながら苦笑いをしていた。

「ささ、タイプは何？」

ここはなんとかして答えるしかないだろう。

「そ、そうね、優しい性格の持ち主かしら」

「ほうほう」

なんとか切り抜けることができた。

ああ嫌だ嫌だ。

あの神め。あいつのせいでこんなめんどくさい答え方をしなければいけないなんて。

「さて、ドンドン行こう！...」

まだまだ続く質問タイム。

心の中ではめんどくさい気持ちもあったが。

同時に夢が叶って嬉しい気持ちで一杯だった。

2 - A (後書き)

更新が遅いくせに全然ストーリーが進んでいない…
ホント申し訳ないです…

あの方はもうチョット先になります。

歓迎会（前書き）

やっとノートpcが手に入った…

これで家に帰らなくても外で書けるのでこれからは速くなると思います。

そして、こんなに更新が遅いのと話しがあまり進んでいなくて申し訳ございません；

こんな感じではございますがこれからも宜しくおねがいします。

あと、あるキャラがうざくなっています。

歓迎会

「はあ、疲れたな」

一時間全部を質問に使った後何事も無く授業をこなし現在、全ての疲れを一言で表すように独り言を呟きながら一人歩いている。

質問攻めをしているときは色々大変だった。

エヴァはずっとニヤニヤしているし、タカミチは椅子に座ってドンマイオーラを出しながらタバコを吸っているし（ていうか教室の中でタバコを吸っていいのだろうか？）、刹那は警戒しているしなどカオスなことになっていた。

その後学校に行っているが独学で勉強していたのですごく簡単だった。

そして今、放課後なのだが委員長が後で教室に来てくださいと言っていたので約束の時間まで時間があるので適当に歩いている。

ただ、あまり人気のないところを歩いている。

それは何故か？

後ろから警戒オーラを感じるからだ。

取り敢えず人気のないところまで歩いた。

はあ、ほんとめんどくさい。

「さっきから感じるのだけど、何？さっさと出てきたら？」

と挑発するような感じで独り言を言うと二人出てきた。

「気づいていたとはね。だからこんな場所を歩いていたのかい？」

「…」

出てきたのは真名と刹那だった。

恐らく刹那が頼んで一緒に来たのだろう。

「で？何のようかしら？」

「この時期に転校するなど普通に考えてありえないことだ。
貴様、いったい何者だ？」

「学園長から許可をもらって登校しているのだけど？」

「ふん、そんな事ありえないことだ。どうせ言っただけで本当は許可などもらっていないのだろう？」

…開いた口が塞がらない。刹那ってこんなにアホな奴だっけ？

「何を根拠にそんな事をいつているのかしら？
まさか確認をとらずにただ憶測を言っているわけじゃ、ないよね

「？」

「そ、そんなわけ」

「もついいわ。龍宮さんでしたっけ？」

「話を聞け！！」

うるさいなあ……

確認もしない奴がギャアギャア騒ぐんじゃねえよ。

「落ち着け。で、何をすればいい？」

「学園長に今電話をしてくれないかしら？
こいつじゃ話にならないから」

「な！！き、貴様！！」

「落ち着けと言っているだろう。わかった、今連絡するよ」

「助かるわ」

このかのことになるとここまでバカになるのか。
…恐ろしいわあ。

「もしもし、龍宮です。少し質問したいのですが…ええ、そのことです。」

…わかりました。今夜十時ですね。わかりました」

終わったか。

恐らく今日の夜、顔見せの時に全員に説明するつもりなのだろう。

「刹那、こいつのことは今日の夜十時に全員に説明するだってさ」

「な！それじゃ、それまでこいつを放っておけというのか？！」

「そうだ。それと、こいつの力を皆に見せるために模擬戦をするらしい」

「…そうか。わかった」

ふう。なんとかなった。
本当にめんどくさい。

「貴様」

「なにかしら？石頭」

「やめないか、二人とも」

「もし、お嬢様「木乃香だ」に手を出してみろ。
その時は貴様の首がないと思え」

「相手から近づいてきたらどうすればいいのかしら？」

「近づくな。自分から離れろ」

「…ねえ、龍宮。この石頭どうにかして欲しいのだけど」

「すまない。今刹那は頭に血が上っていてね。
まあ、私が何とかしておくよ」

「助かるわ」

刹那が何か言う前に回れ右をして逃げた。
本当に、勘弁してくれ…

ウザいことが起きたけど散歩をしていたら約束の時間になったので
教室に戻った。
すると教室の前に委員長が立っていた。

「お待たせしましたわ。
どうぞお入りになって」

そう言うと委員長は扉を開けるよう促した。
俺は言う通りに開けた。
開けた途端、

『ようこそ！！2 - Aへ！！』

と言いながら俺に向けて皆がクラッカーを鳴らした。

…まあ、原作を読んでいた俺はネギが来たときに歓迎会をしていたから俺のときにもするというのは予想できていたよ？

ただ、原作よりも凄かった。

食べ物も立食パーティーレベルの量で原作にはなかった垂れ幕やら折り紙で作った飾りなど装飾も凄かった。

俺はそれに驚いて立ち止まった。

「？どうしました？」

「…なんで？なんで、こんなに派手に歓迎してくれるの？別にこんなに豪華にやらなくてもいいんじゃないかな？」

「？何をおっしゃってるのですか？」

「え？」

「この歓迎会は私たちとあなたが親睦を深めるために、そして2・A全員であなたを歓迎するためのものですわ。
なら派手にするのは当たり前のことですわ」

…俺は委員長が言った言葉に感激した。
前の世界では俺のためのパーティーなんかされたことがなかった。
そういうこともあって泣きそうになった。
やばい、涙がでそうだ。

「?どうしました?」

「いや、ちょっとホコリが目に入って」

と苦し紛れに言ってみたが委員長は

「ふふ。そんなに喜んでもらえて準備をしたかいがありましたわ」

「!!!!べ、別にそんな…」

「ふふふ」

こんな感じに泣きそうになっているのがばれてしまった。

「委員長独占しすぎー!!」

「そつだそつだ!!」

委員長と二人で話しをしていると待ちきれなくなったのか騒ぎ始めた。

「皆が騒ぎ始めましたので主役の棚町さんは真ん中の席へどうぞ」

委員長が皆の真ん中に開いている席に案内してもらった。

「さて、それではみなさん。堅い挨拶は嫌いということですので、とりあえずこれが乾杯の挨拶とさせていただきますわ」

『いえゝい!!』

「それではみなさん、」

『かんぱゝゝい!!!!』

めっちゃくちや簡単な挨拶をした後俺はジュースを飲もうとしたら

「なあなあ、ちょっとええかな」

木乃香が話しかけてきた。

同時に教室の端っこにいる石頭が俺に向けて殺気を放ってきた。
いい加減にしてくれ…

「？なにかしら。近衛さん」

「名前でええよ」

「それなら木乃香さん、どうしました？」

「いきなりで悪いんやけど、ここに来る前何かあったん？
おじいちゃんが理由なしに呼ぶわけあらへんから何かあったんかな
なと思ってな」

ああ、なるほどね。
さすが学園長の孫。
勘がいいねえ。

ただ、本当のことを言うわけにはいかないからはぐらかせてもらおうよ。

「ごめんなさい。今、この楽しい雰囲気の中で話せることじゃないから話せないわ」

「そうなん？ならええで。」

気軽に言えない様な理由なら無理に話さんでもええで」

「ごめんなさい、いつか言えたら言っわ」

そういうとあまり深く聞く必要はなかったのだろう。
笑顔でアスナのところに戻っていった。
それを見送っていると

「あ、あの〜」

「ん？」

声が聞こえたのでその方向に顔を向けるとのどかちゃんがいた。

「なにかしら？ええと…」

「み、宮崎のどかです。どうぞ、よろしくお願いします」

「「ちら」そ、よろしくね」

「あ、あの、これどうぞ」

「？」

とのどちゃんが俺にプレゼントしてくれた。
これってもしかして…

「図書カード？」

「は、はい。ぜひお使いになってください」

「…」

なんて、なんていい子なんだ。

「？あの、どうしました？」

「い、いえ、その、プレゼントを買ったことがなくてちょっと嬉し

くて…」

そう、俺は親や親戚の人からは貰ったことはあるが同年代の人からは貰ったことがない。

だから今、嬉しくて涙が出てきた。

「ぐすん…」

「え？」

「ぐす、その、ありがとね」

「あ、はい。どういたしまして」

泣きながら感謝の言葉を言うとのどかちゃんは笑顔で応えてくれた。周りの皆はこの状況を見て微笑んでいた。（一人を除いて）俺は少し恥ずかしかったがそれ以上にとても嬉しかった。

俺はこの時、心の中である決心をした。
自分の力の使い道を…

歓迎会（後書き）

次回は模擬戦です。

感想等お待ちしております。

夜の会合 前編（前書き）

誰が言ったのだろうか… 大学生活は楽だと；

遅くなりまして申し訳ございませんm（――）m

サークルやらなんやらが忙しくて予想より遥かに遅くなりました。
言い訳すいません。

あと、話もまさかこんなに長くなるとは…

話もまったく進んでなくて申し訳ございません。

あの人の登場はもうしばらくお待ちください。

夜の会合 前編

泣いたり笑ったりとても感情豊かに楽しむことができた歓迎会は終わり、片づけを手伝おうとしたら皆から断られた。理由を委員長に聞いたら

「片づけが終わるまでが歓迎会。
なら、その主役であるあなたを片付けの手伝いをさせるわけには
いきませんわ」

とのこと。

俺は心の底からお礼の言葉を言っつてエヴァの家に戻ることにした。
ちなみに、エヴァは手伝う気はないと言っつてすぐに帰った。
茶々丸は手伝っている。

この後はエヴァの家で飯を食っつて休んだ後、別荘を使っつて能力の確認と模擬戦。

そして夜十時、魔法先生、生徒達との会合。

学園長とタカミチは大丈夫だと思っつが刹那の反応からして半分以上は俺を敵として見ていると思っつ。

まあ、しょうがないと思っつ。

俺が味方だという情報もなくいきなり自分の領域に入っつてきたのだ。しかも俺に関する詳しい情報は皆無。

怪しむのは当然だと思っつ。

なら、まず学園長とタカミチのために自分の力を見せつつ周りの奴らに味方だという意思を見せればいいのだ。

そのためにもまずは自分の能力を少しでも極めるために別荘で鍛える予定だ。

と一人で考え事をしていたらエヴァの家に着いた。

「ただいま」

「帰ってきたか。」

で？初めての女子中の生活はどうだった？」

「とっても楽しかったわ。」

夢が叶って本当によかったわ」

「そうか。それはなによりだ」

エヴァは俺の答えに満足したのか口が綻んだ。

「それで、この後のことなんだけど……」

「夜の会合のために別荘で能力の確認か？」

「そう。ついでに斬魄刀の確認もね」

そう、確かに能力の確認もしたいけどやっぱり朝神からもらった斬

魄刀の能力が気になる。

あの様子だとたぶんあの石頭が喧嘩を吹っかけてくるから相手に合わせる意味で確認したい。

飯に吹っかけてこなくてもちよつと頭を冷やしてもらっけどね。

まあ、能力を使えばいいけど刀があるんだから使っべきでしょ。

本番では能力は使わないけどね。

「ああ、あの謎の力を発していた刀か。

あれはただの刀ではないのか？」

「いいえ、斬魄刀には必ず何かしらの能力があるわ。

例えば氷の龍を出したり、剣が桜の花びらになったり、刀身が灰になったりなど色々あるわ」

「なるほど。つまり刀身の形が変わるものや魔法みたいなことができるのか」

「簡単に言つとそうなるわ」

ただ、あの神が送ってきた斬魄刀だ。
恐らく能力はチートだと思うけどね。

「とりあえず、細かいことは別荘で教えてもらおう。
今から行くか？」

「ええ、会合の時間までできる限りやりたいわ」

会合までまだ四時間以上ある。
別荘を使えば四日もある。

「よし、ならば今すぐ行こう。
今回はチャチャゼロと近接戦闘の模擬戦もやるぞ」

「え!？」

「オ、ヨウヤクカ。悪イケド本気デйкаセテモラウゼ」

「…お手柔らかにね」

会合の時、生きてるかな？俺。

side タカミチ

雲ひとつなく空に点々と星がきれいに光っている今日、昨日現れた
棚町君の力がここ世界樹広場にいる魔法先生、生徒に知らしめるこ
とになる。

ただ…

「この状況はいつたいどういうことかなあ…」

これからくる棚町君に対しての情報がないからだろう。
全員疑問や不満の態度をとっている。

僕や学園長がこの場で説明しようと思っていたから何も聞かされて
いない人にとってとても怪しい存在だろう。

ただ、棚町君の過去を知っている人にとってこれはあまりにひどい。
先に説明できればいいが話を聞く前に攻撃してしまう者がいると思
う。

現にすでに攻撃準備が整っている者がいる。

大丈夫なのだろうかと心配していたら

『大丈夫じゃ、タカミチ君』

『どういうことですか？』

『まあ、待っていればわかるわい』

『それはいったいどういつ!』

学園長と念話して話していたそのとき、

空気が重くなった

「なっ!」

『フオフオ、素晴らしい。とても昨日能力に目覚めた者とは思えないわい』

これはまだ姿を見せていない棚町君からでている闘気だと思いがまさかこれほどは…

この僕が少し気にしないとつらいぐらい強い闘気。

これを昨日今日で？

『気をつけるよ、タカミチ。あいつはチートだ、異常だ。
私たち魔法使いの常識はあいつには当てはまらん。気をつけるこ
とだ』

と世界樹の木の上から茶々丸君と一緒にこの場を見ているエヴァか
ら念話で忠告してきた。

ああ、エヴァの言う通りだよ。

高位の魔法使いでも別荘を使ってもこんな短時間で会得できる
はずがない。

そして、僕や学園長、エヴァなら耐えることができるが他の人たちは
厳しいだろう。

現に先ほどまで戦闘態勢をとっていた先生や生徒の中から杖を落と
したり、座り込んだり、懸命に耐えているが震えが止まらない者が
出始めている。

先程までの強気な姿勢は消え、生徒達からは恐怖を、先生達からは
より警戒するようになった。
そうこうしている内に

「こんばんわ、皆さん」

いつの間にいたのか僕達の目の前に棚町君がいきなり現れた。

【なっ！！！！】

この場にいる（学園長、エヴァを除いて）すべての先生、生徒が驚きの声を上げた。

その中には僕も含まれている。

何の気配もなく、何の予兆もなく現れたのだ。

まるで今までいたところから直接ここに瞬間移動したかのような感じだった。

縮地ではどんなにうまくなくても使用する前に使用者の気配がわかるしなにより移動できる距離が全然合っていない。

転移魔法では転移先に魔方陣がでる。

影を使った転移でも影から出るため頭から出るはずだが柵町君は一瞬で体全体を転移した。

それ以前に転移した場所が月の光で照らしていたため影がなかったのでまずありえない。

これが、柵町君が持っている能力…

「ふおっふおっ、よく来てくれたのう。柵町君」

「遅れて申し訳ございませんでした。

その代わりとして少し変わったことをしましたが…」

「別に気にせんでもよかったのじゃが。

まあ、幾分楽しめたぞい」

「ありがとうございます」

周りの反応を他所に二人で話している。

周りは先程のことがまだ理解できないのか混乱している。

僕は…まあ理解するのをあきらめたから別にそれほど混乱していない。

「それじゃ、早速みんなに自己紹介を頼むわい」

「わかりました」

と言うと先程まで出ていた闘気は消え、逆にこの場を朗らかにするかのように綺麗な笑顔で挨拶をした。

「はじめまして、皆さん。本日からあなた方の仲間になります棚町京です。」

「よろしく願います」

恐らく、これから仲間になるのだから少しは仲良くしてくれと言っているのだろうがさっきの殺気を感じた者からはそうは聞こえないだろう。

現にいまだに警戒している人が大勢いる。

「ふおっふおっ、柵町君に質問したい者もあるじやろうがその前に柵町君の強さどのくらいなのか見極めさせてもらおうかの。相手はタカミチ君じゃ」

【なっ！！】

僕は事前に知らされていたので驚きはしなかったが他の先生や生徒は驚きというか不満があるらしい。

「学園長！！なぜ相手が高畑先生のですか！？」

「柵町君の力とこの学園の先生、生徒の力を比べた結果じゃ」

「それじゃ、我々はあの素性もわからない奴よりも弱いということですか！？」

「それじゃあ逆に聞くがのう、ガンドルフィーニ君。

君は先程柵町君が出していたあの闘気を君はだせるのかのう？」

「そ、それは…」

と学園長とガンドルフィーニさん達が言い争っている

「ご不満があるようでしたらお相手しますが？
ガンドルフィーニさん？」

「なに？」

棚町君がこれ以上醜い言い争いを聞きたくないような顔をしながら
言ってきた。

「そんなに私が高畑先生と戦うのが不満なのでしたら相手をします
といっているのですけど。
いいですよ？学園長」

「ふむ、みなご不満を持っているのならそれでもよからう。
よいかな？ガンドルフィーニ君」

「ええ、かまいませんよ。」

このまま舐められたまま仲間になっても困りますからね」

いやいや、それは逆だと思えますよ…
そう心の中で言っていたら

『高畑先生』

『何かな？棚町君？』

『一瞬で終わらせますので準備をしていてください』

『…わかった』

やはり棚町君自身エヴァとの訓練によって鍛えられたのかガンドルフィーニさんでは戦いにすらならないと思っているのだろう。

現に今ガンドルフィーニさんと向かい合っている棚町君は戦闘態勢をとっていない。

「棚町君だっけ？」

「何でしょう？」

「やる気はあるのかな？見るからにやる気がないように思えるのだが…」

「思っているのではなく本当にはないのですが」

「君は喧嘩を売っているのかね？」

「あら、年下の私ごときの言葉で喧嘩を買ってくれるのですか？
それは何よりです」

おお、なかなか舌戦がうまいな。
考えが一直線なガンドルフィーニさんが相手とはいえ、口で状況を
有利にさせるとは。

「それに」

「なにかね？」

「私は高畑先生が相手だと思っていたのですが、私程度の口で怒る
ような相手だとは……」

「き、貴様……」

「あれ？これ模擬戦ですよ？
まさか始めの合図を聞かないで自分の感情に身をまかせて攻撃す
るほど馬鹿なのですか？

ああ、今までこの人から教わっていた生徒が可哀想で泣けてきま

すね
「

…」

うわ、これはひどい。

もうこれは勝ったも同然だね。

「それでは、模擬戦、」

学園長が開始の合図を言うとガンドルフィーニさんが身構えたが

「始め!!」

そう言った瞬間、ガンドルフィーニさんのみぞに棚町君の拳が入った。

「がっ!!」

そして拳の先から無詠唱で戒めの矢を撃って縛った。

「なっ！！」

「これで終わりね」

そして、いつ出したのか右手に持っているナイフを首に当てながら
そう言った。

この間僅か約五秒。
本当に一瞬で倒した。

【…】

この場にいるすべての先生、生徒達があまりの攻撃の速さに驚いて
固まっている。

勿論学園長や僕も入れて。

「学園長？」

「う、うむ。それまで！！」

そついうと持っていたナイフをしまい、魔法を解いた。

「やっぱりこの程度ですか」

「くっ」

あまりに一方的に負けたのが悔しいのかまだ認められないようだ。
学園長の言ったとおりやはり僕がやるべきだったか。

「学園長、僕がやりますよ」

「うむ、頼むわい」

それじゃ、僕の力で神からもらった能力、見定めてもらっよ。

side 棚町

予想外デース。

自分から吹っかけてなんだけどまさかここまでガンドルが弱いとは

思わなかった。

まあ、予想はしてたけどね。

あと、エヴァからの念話で教えてもらってたけどここまで雰囲気が悪くとは思わなかった。

だからちよつとあれを出してみたり、『空間移動』の能力をつかって驚かせたりなどをしてみた。

ちなみに二つとも学園長の許可をもらってやった。

そして、ガンドルとの戦い。

不毛な言い争いをずっと聞くぐらいなら俺が我慢して相手になればいいんじゃない？と思って申し込んだ。

で、あの赤い従者の真似とは言わないけどちよつとがんばって舌戦してみたが、ひどいもんだ。

超初心者 of 俺相手に負けるなんてどんだけだよ。

その後早くタカミチと勝負したいから速攻で倒した。

無詠唱はエヴァが教えてくれたのだがぶっちゃけほとんど自分でなんとかなった。

さすが『想像を力に変える能力』。

魔法の出し方を漫画で読んだり小説のネタのために資料を読んで覚えていたからこの能力のおかげで苦もなく出せた。

本当にひどい能力だ。

そして、現在。

「それじゃ、今度は僕が相手だよ。

棚町君」

「ええ、受けてたつわ」

おっと、一応言っておこう。
言っても変わらなと思うけど...

「高畑先生」

「何かな？棚町君」

「本気で、お願いしますよ」

「それは君の力次第だよ」

ですよね。

もし仮に力が弱かったら出す必要がないもんな。
ま、それはありえないが。

「わかりました。ご期待に沿えるようがんばりたいと思います」

「期待してるよ」

言うことはなくなったのでいつでも戦闘できるように身を固める。

「準備できたようじゃの。
それでは、模擬戦」

「始め!!」

合図を出した瞬間、タカミチが居合い拳を出してきた。

普通初見で反応できるわけがないが漫画で出てきていたのを覚えているうえ、『直感』のスキルで反応できた。

数は二発。

一つは顎に、もう一つはみぞを狙って撃ってきた。

顎のは右腕で守り、みぞのは右足を九十度時計回りに動かして避けた。

右腕に当たるが右腕は強化の魔術で強化しているため全然痛くない。

「まさか防がれるとはね」

タカミチもこうなることは予想できなかったのだろう。
少し驚いていた。

「この程度ですか？
そんなわけないですよね？」

挑発するような感じで言ってみたが

「はは、確認程度だよ」

と軽く流された。

やはりあのガンドルとはまったく違うな。

「それじゃ、今度は私の番ですね」

使う能力は…説明がめんどいからもう『超電磁砲』でいいや。
右腕に電気を帯電させいつでも撃てるようにする。

「雷の魔法？いや、魔力が感じられない。これは…」

「考えるのはいいのですが、

隙だらけですよ」

隙があつたので縮地で後ろをとって雷を放った。

「一撃目はサービスです。
避けてください」

「くっ!!」

俺の言葉に反応したのだろう。
あたる直前に瞬動で避けた。
避けた場所は雷によって地面が陥没した。
障壁を使っても防ぐのは難しいだろう。

「すごい威力だね。
魔法じゃないね」

「ええ、まあ魔法ではないですね」

詳しくはここでは話さないけどね。
めんどくさいし。

「初見で僕の技は見極められたからね。
本気を出そうかな」

「したほうがいいと思いますよ。
後で後悔すると思いますし」

「はは、それはいやだね
それじゃ、本気で行くよ」

と言つのと同時にあの構えをした。

右手に気

左手に魔力

合成！！

これが、『咸卦法』。

とりあえずなんか右手と左手の光を合わせた感じかな？
見た目的に。

ただ、圧力というか闘気がさっきの状態とはまったく異なっている。
これが、タカミチの本気。
まあ、ぶっちゃけると俺も能力を使えば使えるけど今回は使わない。
さすがに怪しいと思われるしね。

「それじゃ、本気でいくよ。」

すぐにやられるのはなしだよ」

「ええ、それは勿論です。」

観客の期待に応えなければいけませんからね」

と言つのと同時に俺はさらに強化をした。

あと、エヴァから教えてもらった魔力供給、『戦いの歌』。
これを使ってさらに自分を高めた。

「はは、さらに気が強くなるとはね。
けど、見かけ倒しにはならないでね」

「それはありえないのでご安心を」

さて、それではごらんいただく。

神からもらった能力を。
チート全快の能力を…

夜の会合 前編（後書き）

やけに長いのにまったく進んでいない…
しかも中途半端に終わらせてしまった…

誤字・脱字、設定に対して何かありましたらご指摘ください。

夜の会合 後編（前書き）

本当にすいませんでした…

レポートやらサークルやらいろいろなことが大変で書けませんでした。

あと、戦闘描写が書けなくて詰まっていました…

遅くなって申し訳ございませんでした…

夜の会合 後編

side エヴァ

タカミチが『咸卦法』をし、京が『戦いの歌』を使って静かに睨み合った状況が続いた。

最初に動いたのは京だった。

縮地でタカミチの真正面に移動した。

はつきり言つてなぜそのような行動をしたのか私にもわからんがタカミチは手加減なく豪殺居合い拳を放った。

だがそれが京にあたることはなかった。

京はそれにあたる瞬間右斜め前に飛び込んで避けた。

「はっ！！」

右腕が地面に着いた時、それを軸に体を反時計周りに回りながら魔力を込めた左足をタカミチに叩き込んだ。

タカミチは驚きながらも冷静に左腕をポケットからだし攻撃を防いだ。が、

「くうっ！？」

その蹴りは思つた以上に強く防いだはずのタカミチは吹っ飛んだ。タカミチは吹っ飛ばされながらもポケットにしまっている右手で居

合い拳を放った。

京は当たらないようその場を飛んだが無理して飛んだため態勢が崩れてしまった。

タカミチはそれを予想していたのか豪殺居合い拳を京に向かって放っていた。

その攻撃はほぼ直撃コース。

今の棚町の状態でその攻撃を避けるのは厳しいだろう。

私でも封印状態の今では避けるのは難しいだろう。

だが、棚町は

「ふふ」

不敵な笑みを浮かべながら右手を豪殺居合い拳に向けた。

その時…

豪殺居合い拳が何かに当たって直撃コースが曲がった。

『なっ！！！』

豪殺居合い拳が曲がったことに私以外全員驚いた。

私はなぜ曲がったのか理由を知っているのであまり驚かない。

あれは違う世界の技で確か『虚弾^{バラ}』。

魔力の塊を高速で打ち出す技だと聞いた。

技の速さが速く別荘の中の私でも反応するのが難しかった。

恐らく豪殺居合い拳に向けていた右手から出して弾くようにして放ったのだ。

弾いた後京がタカミチが吹っ飛ばされた場所に向かって電撃を放った。

それに気づいたタカミチはすぐに態勢を整え豪殺居合い拳を放ってなんとか相殺した。

京は相殺したときにでた煙の中に突っ込んだ。

煙から出ることなくその中から電撃を放っているがタカミチは危険を察知し煙の前から瞬動で逃げたため当たることはなかった。

が、その行動は全く意味がなかった。

「ここに移動するのはわかっていましたよ。高畑先生」

「なにっ!!」

なんとタカミチが瞬動で移動した先には煙の中に突っ込んでいたはずの京がすでにいたのだ。

恐らく瞬動で移動したのだろうが気配がなさすぎる。

ここまでくれば縮地の最高レベルである。

これほどの縮地ができるのは学園内だけでは私ぐらいだろう。

別荘を使ったとはいえまさか数日でここまでとは…

「解放。魔法の射手・収束・雷の百矢」

移動した直後で動くことができないタカミチを狙って京は右手で殴りながら魔法の射手を放った。
タカミチは殴られる前に『咸卦法』の密度を上げてなんとか防御した。

「ぐはっ！！」

しかし、それで完全に防御できるはずもなく腹に直撃したタカミチは苦悶の表情になり、血を吐いた。

そして、京はここから逃がさないと言っているかの如くタカミチの周りを囲むかのように電撃を放った。

さながら爆弾が爆発したのような爆音をだし地面に雷撃が当たったためさっきの京が放ったのと同じように煙がでた。

タカミチの周りに放ったためたとえ魔法の射手付きの拳に耐えることができてもしその場から動くことはできないだろう。

現に煙の中からタカミチが出てこない。

ダメージが大きくて動けないのか、雷撃によって動くことができなかったのか……

どちらにせよ煙がはれない限り二人がどうなっているのか分からない。

そして、煙が徐々にはれて二人の様子が見えるようになった。

『！！！』

その様子を見た魔法使い供が驚いた。

なぜなら…

タカミチは仰向けに倒され、京は馬乗りになりながらその上に乗っている。

京は右手に真つ黒の剣を持っていてその切っ先を首に向けていた。これで勝敗は決した。

そのことを高らかに宣言するかの如く、京は言った。

「私の勝ちですね。高畑先生」

side 棚町

「私の勝ちですね。高畑先生」

電撃を放ったことでた地面の砂を電磁石で集めて作った剣を高畑

先生に向けながら俺は勝利宣言した。
ふう〜。

なんとか勝つことができた。
はつきりいつて少しやばかった。

ちよっと思いつきで『虚弾^{バラ}』を使ってみた。

あのままだと直撃するから避けようと思ったけど隙を作りたかったからちよっと使ってみた。

霊圧を使ったけどエヴァには説明するのは今度でいいかな？と思って魔力にしておいた。

さすがチート能力。

ホロウ専用の技のはずなのに使うことができるとかね。

まあ、別にいいけど。

「そこまでじゃ。勝者は柵町君じゃな」

学園長がそう言う俺は能力を解除し、タカミチを起き上がらせた。

「ふう、強いね。柵町君。

本気出して手も足もでないとはね」

「いえいえ、高畑先生が最初っから本気で戦っていたらやられていましたよ。

あと高畑先生が見たことがない技を使いましたので逆に勝てないほうがおかしいですよ」

「ははは、まあそうだね」

と互いが互いを褒め合っていると先程秒殺されたガンドルがきた。

「一つ質問したいのだけどいいかな？」

「なんででしょう？」

「君はその力を何の目的に使うのかね？」

ああ、やっぱりそういう質問しますか。

まあ、当然といえば当然だろうな。

麻帆良のなかで一番強いと言われるタカミチを倒すほどだ。
その力をどのような目的に使うのか聞きたいのだろう。

「私は…」

目的はもう決まっている。

歓迎会の時に心に決めたのだ。

「私を友達とってくれてくれる人達、私を助けてくれた恩人を守る

ために使いたい。

そう思っています」

違う世界から来た俺を助けてくれたエヴァ、タカミチ、学園長。
俺を友達として歓迎してくれた2・A（一人を除いて）。

恩を返す感じだけど俺は前の世界ではここまでよくしてくれたことはなかった。

だから感謝という意味でチートであるこの能力を使って守りたい。
そう思ったのだ。

「その人達を守るために使う…か」

やはり立派な魔法使い（マギ・ステルマギ）としてそこは世のため
人のために使って欲しいのだろう。

ほとんどの魔法先生、生徒が微妙な顔になった。

「ほほ、素晴らしい目的じゃ。

儂はいいと思うぞい」

「僕も同じ意見ですね」

と学園長とタカミチは応援するという意志を示してくれた。

「棚町君に質問したい人もおるじやろつがもう夜も遅い。
また後日、個別に質問することにしようかの」

確かにもう夜も遅い。

明日も学校はあるのでもう解散するべきだろう。

「今日の会合はこれにて終了じゃ。
解散!!」

そういつと皆言いたいことがあると思つけど学園長の言つとおり素直に帰った。
さすがに上の命令に逆らつてまで質問する奴はいないか。
そう思つてエヴァの家に帰ろつとしたら

「ちよつといいかな?」

と龍宮が尋ねて来た。

「どうしたの?

学園長の言つとおりもう夜遅いから明日にしたほうがいいと思つけど…」

「いや、用があるのは私ではなく刹那のほうでね。
私はその伝言としてね」

ああ、なるほど。
つまり

「刹那本人は歓迎会前のことを気にして直接呼びにくいから龍宮に
頼んだと」

「そういうことだよ」

やはり…

めんどくさいけどこの後の事を考えるとここで良い関係を築けたら
と考えたらいいかな？

「わかったわ。」

とりあえずついていけばいいのかしら？」

「ああ、すまないね」

俺は龍宮についていくことにした。

刹那の考えはあの時と変わっているのだろうか？

夜の会合 後編（後書き）

全然話が進んでない…

とりあえずタカミチ戦は終わりました。

次は要望どおりあの真面目剣士を相手にしたいと思います。

駄文ですいませんが気長にお待ちください…

刹那の思い、そして…（前書き）

本当に申し訳ございませんでした！！！！

テスト勉強やらレポートやらようやくできるようになったバイトやらで遅くなりました。

この場をお借りしてお詫び申し上げます。（´Д´）。。

そしてまだテストが終わっておらず勉強をしないといけませんのでまた遅くなると思います。

わがままを言って申し訳ございませんがしばらくお待ちください…

そんな最低なことをしているにも関わらずなんとPV17万を超えました！！なんとお礼を申し上げたらいいいのか（´Д´

こんな不甲斐ない者ですが暖かい目で見てほしいと思います。

刹那の思い、そして…

side 刹那

彼女の戦いは素晴らしかった。

学園の中で学園長を除いて、一番強い高畑先生を無傷で倒した。

しかも、彼女はあれで本気を出している感じではなかった。

彼女が味方になると考えるととても心強い。

しかし、私たちはまだ彼女がなぜその強大な力を使うのか、その目的を知らない。

だからさらに警戒するのは当然のことだと思う。

そして、ガンドルフィーニ先生が代表で質問してくれた。

その力は何のために使うのか。

その質問に彼女は、

友達を守るため、恩人のために使う

と言った。

友達というのは、恐らく2・Aのことだろう。

つまり、お嬢様を守ると言っているようなことだ。

素晴らしいことだと思う。

けど、本当にそう思っているのか。

心の底からそう思っているのだろうか？

その場凌ぎに言っているのではないのか？

彼女について何も知らない私は、彼女の言ったことを信じる事ができなかった。

だから私は、真名に頼んで彼女を呼んでもらうことにした。
自分で呼べばいいのだけど、歓迎会前のやりとりの後だから行けなかった。

言葉を聞いても信じることができない。
なら、手段は一つ。

剣を使って思いを聞くだけだ…

けど、この時私は気付いてなかった。
本当に戦いたい理由を…

s i d e 棚町

龍宮について行くと、桜通りについた。
原作で、エヴァが吸血行動をしていた所だ。

今の時期は、紅葉で風が吹くと紅く色づいた葉っぱが舞って風流があった。

そして、その風流ある桜通りの真ん中に、俺を呼んだ奴がいた。

「どうも、桜咲さん。

私になにか御用ですか？」

「…」

俺の質問に答えず、ただ平然と立っている。
恐らく、俺の力の使い方に対してのことだと思っが…

「あなたは…」

と考えていると、刹那が話し始めた。

「あなたは高畑先生を倒す力を、友人や恩人を守るために使う。
そうおっしゃった」

「ええ。それがなにか？」

「だけど、私はまだそのことを信じれるほどの信頼、情報を得ていません」

なるほど。
つまり、

「高畑先生を倒すことと、信頼を得ることは関係ないと」

「そういう事です」

まあ、確かにそう思うだろうなあ。

俺がもし逆の立場だったら、突然現れて味方の中で一番強い人を倒して、その後綺麗事を並べて信用してくれって言われても困るだろうなあ。

「じゃあ、どうすればいいのかしら？」

「私はあまり賢い人ではありません」

認めたよ。自分で認めたよ、この人。

と言っていると、雰囲気が刹那の雰囲気が変わった。

「だから、私はこの剣を使って確かめたいと思います」

と言つると同時に、剣を抜き戦闘態勢に入った。

「けど、私は高畑先生を無傷で倒せるあなたに勝てる気がしません

…」

そう言いつつ気を溜め、そして

「ですので、不意打ちでいかせてもらいます!!!!」

瞬動で距離を詰めて、気を溜めた夕凧で斬りかかってきた。

s i d e 刹那

棚町さんは、あの高畑先生を倒すほどだ。
だから、バレないように、剣に気を少し溜めて斬りかかった。
しかし、

棚町さんは、どこから出したのかわからないが、剣が入っている状態の日本刀の鞘で、平然と私の攻撃を受け止めていた。

「な!!!!」

「まあ、あの模擬戦を見たら真正面から斬りかかってくるようなことはしないわよね。」

なかなかいい判断だけど、気が剣から漏れていたから助かったわ」

あの気を感じたのか。

確かに気を溜めていたけど、それは数で表すなら一から五とわずかに増えたレベルだ。

これは魔法生徒は勿論、先生でも気付くのは難しいほどの量だ。それを当たり前のように感じるとは…

「あと…」

棚町さんが何か言うのと同時に

「行動が遅いわ」

私の剣を、右手に持った剣で受け流し態勢を崩された瞬間、棚町さんがいつの間にか気を溜めていた左手で私の腹を殴ろうとした。が、しかしまるわかりです。

「その攻撃はよんでました」

私は、両手で持っていたのだが右手だけにし、空いた左手で棚町さ

んの左腕に叩きつけて攻撃を逸らそうとした。

そうすることで、柵さんは態勢を崩し、その隙に体を時計回りに回転しながら斬りつけようと私は考えた。しかし、それが成功することはなかった。

「その言葉、そっくりそのまま返すわ」

柵さんは、殴ろうとしていた左手を使って私の右腕を掴み、そのまま体を時計回りに回りながら遠心力を利用して投げた。

「な！！くっ！！」

私は、投げられながらも必死に態勢を整えようとしたが、柵さんの攻撃を逸らそうと左手で力いっぱい叩きつけようとしたため、その分の力＋柵さんの投げる力が合わさって体が時計回りに回転していた。

そのため、態勢が整えることができずそのまま地面に激突した。

「ぐはっ！！」

柵さんはそのまま追撃できたのだが、やらずに先程投げるときに使っていた左手の感覚を確かめていた。

そう、あたかもおまえはいつでも倒せるぞ、と言っているような感じだった。

「はあ、神鳴流ってこの程度ですか？

あ、そうね。神鳴流が弱いのではなく、あなたがよわいのですね？
ああ、納得しました」

「くっ…」

棚町さんの言葉に少しイラつきを覚えながらも、私はなんとかたつて見せたがあまりの衝撃の強さに苦悶の表情を隠せないでいた。
また、気を溜めていた左手で私の右腕を掴んで投げられたため、右腕の調子がおかしい。

なんとか動かすことはできるが、100%の力を出すのは難しいだろう。
けど、それでも戦うことはできる。
なら、全力を出しきるまでだ。

「へえ、立てるのね」

「当然です。」

まだ、確かめ終わっていません」

「真面目ね」

と言いながら、棚町さんは魔力を溜めていた。

「なんでそんなに確かめたいのかしら？」

「それは、あなたの言っていることが信じられないか」

「違うわね」

「何が違うのですか？」

「もっと素直になりなさい。」

あなたのように遠まわしの守るのではなく、自分の思いで守ることが
できる私に嫉妬しているのでしょうか？」

「…なに？」

「あなたの任務は近衛木乃香の護衛。」

けど、あなたは理由があって木乃香の近くで守ることができない」

「けど、高畑先生より強い私が近くで守ることになったら、遠くで
守ってるあなたの意味が無い。」

だからあなたは嫉妬してるのではないかと」

「そんなことはない!!」

「それなら、なぜこんな勝者がわかっていて無意味な戦いをするのかしら？」

反論しようとしたが、私は凶星に近い感じになった。

…ああ、そうか。

だから私はこんな無意味なことをしているのか…

「…あなたに」

「？」

「あなたに私の何がわかるのですか!!」

そう、私の過去も知らずに嫉妬をしていると勝手に言われる筋合いはない。

「あら？私、先程言わなかったかしら？」

「え？」

「あなたはとある理由で近づくことができないって」

「まさか、この人は私の正体を知っている？」

「そんなはずはない！！」

「あなたの背中には白い何かが付いている」

「な！！」

「そんな…なんで知っている？」

「なんで知っているのですか？」

「企業秘密。それより」

「隙だらけよ」

「！？」

「しまっ！！」

私は話に気を取られすぎて、棚町さんの魔力が籠った拳を避けることができなかった。

その拳は見事に私の渠に当たった。

「がつー！」

気を高めて防御したが、そんなのは棚町さんの拳では雀の涙程度の防御ぐらいにしかない。

私はくらい、そのまま吹っ飛ばされた。

「あなたの護衛は間違っている。

遠くから見守って守ることが護衛なわけがない。

それは監視と言ってもいいわ」

「ぐっ……」

ダメージが大きすぎて立ち上がるのという行動が苦しい。

けど、なぜか棚町さんの言葉が心に響く。

「護衛というのは護衛対象の近くで守ることを言うのよ？

けど、あなたは何をしているのかしら？

遠くでただ見ているだけで歩み寄ろうとせず、本当にただ見ているだけ。

そんな奴が護衛しているとか言わないで欲しいわ」

いや、違う。

心に響くというより…

私の心を燃え上がらせるような感じた。

「…だまれ」

「ましてや、誰かを護衛できるほど強くもないのにね。
自惚れるのもいい加減にしなさい」

聞いているうちに、先程まで立つこともできなかった体が動き始めた。

「だまれ!!」

「凶星を突かれたからと言って逆ギレするのは良くないわ。
だって本当のことでしょ?」

そして、私はもう我慢することができなかった。

「だまれ!!!!!!」

お前に何がわかる！！」

気を無意識に放出しそのまま、瞬動で棚町さんの懷に移動した。そして、居合い抜きする感じで棚町さんに斬りつけた。が、しかし、

「見え見えよ」

棚町さんは、剣を抜くこと無く鞘で私の攻撃を受け流された。私は、居合い抜きで剣を抜きながら、体を時計回りに回転しながら斬りつけた。

「私のこの剣はお嬢様を守る剣だ！！
だからこそ護衛の任務に就いた！！」

しかし、この攻撃も鞘で受け流された。

棚町さんは、私の攻撃を受け流すだけで反撃をする素振りすら見せようともしない。

私はそれにイラつきを覚えながらも攻撃を続けた。
しかし、

「遠くで見守りながら守ることはそんなにいけないことなのか！！」

「あなたは木乃香に知られたくないのでしょうか？
本当の姿を」

私はこの言葉で止まってしまった。

「本当の姿を知られたくない。
けど、木乃香を護衛したい。
だから遠くで見守って護衛するしかない。
そうでしょう？」

それはまさに、私の心を完全に突かれた言葉であった。

「
…なら」

「
？」

「私はどうしたらいい！？」

私の心の中は完全に混乱していた。
先程まで激情していた心に、さらに悲しみの感情が入れ混じって混乱していた。

「私は一族の掟で知られてはいけけない。

けど、私はお嬢様を守ると心に誓った。

なら、私の取るべき行動は遠くで見守って護衛するしかないではないか!!」

私の泣き言の言葉を、棚町さんは真剣な顔で聞いている。

棚町さんの顔を見ながら、私は言葉を言い続けた。

「お嬢様は私の、昔からの幼馴染みであり最初の友達です。

ずっと迫害されてきた私を友達として見てくれました。

そのお嬢様を守ろうとする気持ちがあるにいけないことですか

!!」

「それじゃ、あなた」

「え?」

「そういう行動をされている木乃香の気持ちを考えたことはあるのかしら?」

「!!!!」

「剣の修業で忙しいあなたに会うことができずそのまま麻帆良に転

入し、あなたが麻帆良に転入してもあなたは木乃香の距離を置く。
幼馴染みのあなただからこそ会って話がしたかった。
けど、あなたはそれを拒否した。

それがどれだけつらいことか、あなたにはわかる？」

「
…」

「結局、あなたは自分のことしか考えていないじゃない」

私は、私は…

「なら、わ、私はどうしたら、ええの？」

「簡単よ。距離を縮めなさい」

「せ、せやけど」

「別に過去を話さないと言っているわけではないわ。
ただ、幼馴染みとしての距離に戻さないって言ってるのよ」

けど、私は今までひどい行動をしてきた。
それをお嬢様は許してくれるのだろうか？

「はあ、仕方ないわね。

桜咲刹那」

「？」

「この後、私は技をだしてこの勝負を決めるつもりだけど、そのときその技を耐えることができたならあなたは今まで通りの態度で構わないわ。

けど、耐えることができなかったら、私の言った通り元の関係に戻りなさい」

「なっ！！」

「あなたに決定権はないわ。

こんな無意味な争い、すぐに終わらせるべきだし、なによりあなたの考えを待っていたら朝になりそうだからね」

「くっ……」

言い返せない……

まさにその通りだから反論することができない。

「本気でいくわよ。」

あなたが受け止めればいいのだから、そんなに難しく考える必要はないわ」

簡単に言う。

今の私の体ではあまりにも万全とは言い難い。

その状態であの高畑先生に勝つ人だ。

とてもではないが受け止めるのは難しいだろう。

けど、それでも諦めることはできない。

私は全力で受け止める！！

「覚悟はできたようね。」

それじゃ、

本気でいくわ」

その瞬間、

とてつもない闘気が私に襲いかかった。

それはまさに、虎に睨まれているうさぎの如く。

私は体の震えを止めることができない。

けど、私は構えを崩すという愚かなことはしない。

私の行動は誰にも縛られること無く自分で考えていく。

そのためにも私は負けるわけにはいかない！

棚町さんの構えは居合い抜きに腰を低くし、剣を抜けるようにして構えている。
恐らく、その姿勢からして居合い抜きをするのだと思うが…
しかし

「我流…」

その考えは間違っていたとすぐに認識した。

「十文字斬り!!」

それはまさに、全ての行動が神速といっても間違えではなかった。
一瞬にして私の懐にくる速さ、刀を横、縦と振るう速度、全てが異常なまでの速さだった。

なんとか懐に来たときに反応することができて剣を少し抜くことができたため、生身で受けるということにはならなかった。

しかし、そのあと横払いと縦払いの刀の振るう速度が異常だった。
完全に同時攻撃とはいかないがほぼ遅れなく攻撃が来た。

これこそ、まさに十字斬りといってもいいぐらい惚れ惚れする技だった。

この技を私はなんとか受け止めることができた、のだが…

「なっ!!」

なんと棚町さんは、気を圧縮して技を出していたため、斬空閃のよ
うに斬撃をとばすような感じになったのだ。

斬撃の重さ、気の圧力に負け、私は受け止めながら吹っ飛ばされた。
このまま吹っ飛ばされるのかと思ったのだがそれはなかった。

障害物に当たったわけでもないのに背中に衝撃が走った

「ぐはっ!!」

まるで壁に激突したかの如く、後ろには何もない場所で私の体が止
まっていた。

そして衝撃が走った瞬間

今まで受け止めていた斬撃が爆発した。

「あああああああ!!」

先程の衝撃とほぼ同時に爆発したため、二つからくる痛みに耐えき
れず私は絶叫した。

そして、視界が暗くなっていくのを感じながら倒れた。

私は…

side 棚町

ああ、体の節々がものすごく痛い…

無理に力ツコつけようとして十文字斬りを試してみたけど、今の俺の体では一回が限度だな。

現に無理して振った右腕が戦闘ができるほど動かすことができない。けどなんとか刹那を倒すことができた。

あんなこと言ってたけど、ぶっちゃけると早く元の関係に戻って欲しいと思ってたから、ちょうどいいやって思ってあんなことを言っていたんだけどね。

まあ、別に困ることもないしいんじゃね？

と自分で自己完結していたら倒れた刹那を抱えて龍宮がこっちに来た。

「お疲れ」

「ええ、もう本当にいろいろな意味で疲れたわ」

「まあ、刹那にはいい薬になっただろう。

私はこのまま寮に戻る」

「私も家に帰るわ。夜も遅いし」

「ふふ、ではまた明日学校で会おう」

「ええ、おやすみ龍宮。」

そっちの娘が起きたら伝えてくれるかしら？」

「なにをだい？」

「あなたの行動、楽しみにしているわと」

「わかった。そう伝えておこう」

「ありがとう。では、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

ああ、やっと今日の日程が終わった。

さて、家に帰って茶々丸特製の飯でも食いますかな？

side 学園長

ふおっふおっふお。

棚町君が龍宮君に付いて行かれるのを見て、少しその様子を見させてもらったのじゃが。

まさか刹那くんの問題を少しとはいえ解決してくれるとはのう。助かるわい。

これで、あの正直な刹那君は行動を起こさねばなるまい。

「しかしのう…まさか高畑君に勝つとはのう…」

正真正銘神様から授かったとはいえ、無傷で勝つとは…恐れ入るわい。

「まあ、人手不足の状況では願ったり叶ったりじゃ」

と独り言を呟いていたら

机の上にいきなり黄金色の手紙が現れた。

「これは、もしかあの神様の手紙かのう？」

とりあえず、儂はその手紙を見てみた。

「ふむふむ、これは…」

そして、この手紙こそ本当の始まり、そしてあの男の始まりの手紙
であることを僕は知る由も無かった…

刹那の思い、そして…（後書き）

ようやく、ようやくあの人を出すことができます。
ご意見、ご感想、誤字内容指摘よろしくおねがいします。

本当の始まり（前書き）

今回の話は難産だった…

まあただの言い訳ですけどね（；；）

もっと速く書けるようになりたいなあ…

そしていつの間にかPV20万を超えていました！！

ゝ（°。A）ノ

こんなに更新が遅い作品なのにまさか超えるとは思いませんでした。

（°。ω。°）

本当にありがとうございます！！

本当の始まり

side 棚町

チュン…チュン…

「ん…んあ」

小鳥のさえずり、朝日の眩しさに俺は目覚めた。

刹那との戦いの後、茶々丸特製の晩飯を食って別荘に行つてエヴァと茶々丸、チャチャゼロと一緒に鍛錬をした。

タカミチを無傷で倒せたといつても能力をもらつてからまだ数日しかたつていない。

完全に使いこなせるよう近、中、遠距離戦それぞれの戦い方や、エヴァから魔法を教えてもらつたり、能力確認などを別荘で二日程した後家に戻つてちよつと雑談して寝た。
そして今に至る。

「ふあゝ、良く寝たゝ」

まあ、良く寝たと言っても六時間くらいしか寝てないんだけどね。

「おはよう、紅蓮」

ベットの近くに置いてある斬魄刀”紅蓮”に朝の挨拶をした。
するとそれに応えるかのように少しだけ紅蓮が青色に光った。

制服に着替えた後、リビングに行ってみるとエヴァはテーブルに座
っていて茶々丸は朝食を作っていてチャチャゼロは椅子の上に置か
れていた。

「おはよう、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ」

「おはよう、京」

「おはようございます、京さん」

「ヨウ、ミヤコ」

皆にあいさつした後、茶々丸が作ってくれた朝食を皆で食べる。

「ああ、そうだ京」

「何？エヴァ」

「ジジイから電話がきてな、今日の夜昨日と同じ時間、同じ場所にきて欲しいそうだ」

「理由は？」

「その時に話すだとさ」

「ふん」

「なんだろう？」

「また全員での顔見せをするわけがないし、本当になんだろう？」

「ちなみにタカミチとジジイと私と京、あと茶々丸だけだとさ」

「あれ？全員じゃないんだ」

「どうやら京についてのことらしい。詳しくは教えてくれなかったが」

「なるほどねえ……」

まあ、俺のことに関することだから一々説明するのもめんどくさいのだろう。

これ以上増やせないだろう。

「まあ、とりあえず学校に行きましょう」

「だな」

とりあえず学校に行くことにしてこの話は終わりにした。

そして、この夜の出来事が俺の麻帆良学園での本当の始まりだとは知る由もなかった。

その後、エヴァ達と一緒に教室に着く途中刹那と龍宮に会った。

龍宮は俺に向かって会釈したが刹那は顔を背けてそのまま教室に向かった。

けど、その時に見えた刹那の顔は少し落ち込んでいるような表情をしていた。

その後は何事もなく学校生活を送った。

そして、ついに約束の時間になった…

俺たちは世界樹前広場に行った。

その場所には俺、茶々丸、エヴァ、チャチャゼロ、タカミチ、学園長の四人と一体が集まった。

ここには俺の事情を知っているメンバーしかない。
いったい何が始まるというのだろうか？

「おい、ジジイ、呼んだ理由を教えろ」

「そうじゃの。実は、昨日あの模擬戦が終わった後、俺の机の上にこの手紙が置いてあったんじゃ」

そう言って見せてくれたのは金色の紙だった。

「その紙って…」

「そうじゃ。神からの手紙じゃった」

私に手紙を渡すのではなくこの最高責任者である学園長に渡した。
底から推測できることは…

「内容は今日この時間に集合するようだという内容かしら？」

「そうじゃ。詳しいことは明日説明することじゃ」

「つまり、直接会いに来るっていうことかしら？」

「そうらしいのう」

直接会いに来るということは、何かを渡すことなのか、それとも…

「どうせ、京に関係することだ。
何か渡すということだろう」

「少し違うな、エヴァンジェリン・A K・マクダウェル」

「「「「「！」「」「」」」」

エヴァが一人言っているとその後ろにいきなり神が現れた。

「そんなに驚くことはないと思うが」

「確か、あのとき魔法陣から登場しなかったかい？」

「ああ、あれはめんどくさいからこの方法にした。
前のは演出のためと言ったほうがいいかな」

めんどくさいって…

「で？なんで私たちをここに呼んだのかしら？」

「説明する前に少し準備させてくれ。
時間がないんだ」

と言いながら神は地面に手をかざし、何かの陣を出した。
え？ちよつと待て。この陣は…

「何をしたのかのう？」

「ただ召喚陣を出しただけだ。
その後のことはそこにいる棚町にさせるつもりだ」

俺はこの陣を知っている。

「棚町よ。君にこれを渡そう」

そう言っただけで渡してきたのは赤い宝石だった。
アーチャー、『エミヤ』が召喚される原因、触媒になったものだ

「…これを触媒に召喚しろと？」

「まあ、簡単に言っただけになるな。
ただ、今回ののはちょっと意味合いが違う」

「どういふことじゃ？」

「今回ののは違う。こっちで召喚という方法を使うことで違う世界からこの世界に呼び寄せるための通り道を作ることだ。」

簡単に言っただけだが送信、この召喚陣は受信の陣と言っただけだ」

「なんでそんなめんどくさいことをするのかしら？」

私のようにあなた自身が呼び寄せればいいのではないのかしら？」

「棚町のような違う世界の人間をそう何回も送り出すと世界の拒絶反応、抑止力がひどくなる。

元からいない人間を呼ぶのだからな」

「つまり、異物が混入されたのだからそれを除去するという感じ、でいいのだな？」

「そういうことだ」

となると、俺という存在がここにいる以上絶対抑止力は現れるのだろう。

「だから、今回は違う世界の人間をこの世界に召喚するという方法を使うことで世界からの拒絶反応を弱くする。

けど、この世界にとって異物である以上結局抑止力は発生するのだがな」

「直接神が関わるよりかはひどくないって言うことでしょうか？」

「そういうことだ」

俺が召喚をするということでは世界は俺が召喚をしたと認識し抑止力を出しにくくなるということか。

けど、異物を混入しているということに変わりはなく神がやるよりかはましになるというだけで結局抑止力を出でしまうのだろう。
ややこしいなあ、おい。

「で？なぜこんなことをしてまで違う世界の人間を呼ばないといけないんだ？」

「…ある世界に一人の男がいた。

その男は自分の理想のために自分を犠牲にしてまでいろいろな人を助けた。

しかし、男は自分はただ人が救いたただけで恩をもらうためにやっているのではないと助けられた人間から何一つ恩をもらうことなく救い続けた。

結局その男は助けた人間に裏切られて死んでしまう。

その世界の神はそれを見て『俺は神だ、人間を平等に見ることが使命だ。その神が恩を一度足りとももらうこと無くそれどころか仇で返される人間を黙ってみることなどできない』って言った。

だからその男を違う世界に飛ばすことを決めた。

しかし、その男をただ違う世界に飛ばすと飛ばした世界がその男を抑止力という名で潰しにかかる。

そこで選ばれたのが棚町なのだ」

「私？」

「そうだ。一番いい方法が召喚なのだが飛ばしたい世界の住人がその方法をする让世界が混乱してしまう。」

「そうだろう？元からいない人間を呼び寄せる上にその召喚方法も知らないのにそれを神が直接教えるとなればそれこそ神がやるよりひどいことが起きる。」

しかし、柵町は元々は違う世界の人間。

しかも趣味でマンガやアニメの設定を覚えている。

その覚えている知識の中にある召喚方法を使えば抑止力の度合いが弱くなる」

「なるほどのう」

「というわけで、すまないがやらせてもらっぞ近衛近右衛門。
拒否権はないがな」

「いや、そのような事情があるのなら別にかまわんぞい。
のう、タカミチ君」

「ええ、僕もいいと思います」

「では、早速やってもらおう、柵町」

神からもらったのは生涯衛宮士郎が持ち続けていた赤い宝石。
つまり、fateでの召喚方法をすればいいということだな。

「告げる――」

「汝の身は我が剣に、我が命運は汝の剣に――」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

詠唱していくうちに神が俺の体に付けた魔術回路が悲鳴を挙げていく。

碌に魔術回路を使わなかったためまだ使い慣れていない状態である俺にとって耐え難い痛みだ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

けど、耐えてみせる。

俺が召喚することであの士郎が救われるのならば。
絶対成功させてみせる――！！

そして、

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

最後の行の詠唱を言い終えるとともに限界まで魔術回路が加速した。同時に召喚陣から猛烈な風と閃光が発せられた。その場にいた全員は風と光により目を開けることができなかった。

「はあ、はあ、はあ」

限界まで使用した魔術回路の痛みには耐えながら俺は召喚陣から発生する風と光が収まるのを待った。

そして、徐々に収まり目を開けてみると

そこには赤い聖骸布に身を纏った男がいた。

ただ、原作のアーチャーとは違い髪の毛が真っ白ではなく主人公衛宮士郎の髪の毛と同じ赤色で肌の色も褐色肌ではなく普通の色になっていた。

色々と考えているとその男は俺と目が合った。

そして、俺と男は自然と言葉を発した。

「問おう。あなたが「俺」「私」の「マスター」「サーヴァント」か」

後に、この瞬間こそ俺と剣製衛宮士郎の麻帆良での人生の始まりで
あり物語の始まりを意味するのだと理解するのだった…

本当の始まり（後書き）

もつむちゃくちゃんな展開で本当に申し訳ございません。（ノド）

次回は送信側の話になります。

ご意見、感想、お願いします。

終わりの始まり（前書き）

すっごく遅くなってしまって申し訳ありませんでした！！

今回ものすっごく話しが煮詰まってしまってほとんど書き進むことができませんでした…

言い訳乙 or z

今後こういうことがないよう気を付けるよう頑張りたいと思います。

終わりの始まり

俺は正義の味方になりたかった。

九を救い、一を捨てるのではなく十すべてを助ける存在になりたかった。

あの聖杯戦争で前者になって世界と契約した未来の俺にならないために必死に色々なことを学んだり経験したりした。

遠坂と一緒に倫敦にある魔術協会に行って魔術について学び、

シエルさんから鉄甲作用を付けた黒鍵の投擲術を学び、

バゼットさんから素手での近接戦闘を学び、

遠野志貴と出会う毎に殺し合いながら七夜の体術を（完璧ではないが）見て盗み、

橙子さんから魔術についてさらに詳しく教えてもらったり、

両義さんに兼定を投影した物を使って本気状態になって殺りあったり、

真祖の吸血鬼であるアルクェイドさんや死徒二十七祖のアルトリュージュさんなどとなぜか殺り合ったり、

なぜか分からないけど青子さんに気に入られ死合という名の模擬戦をしたり、

メレム・ソロモンが俺の固有結界が珍しいということで見せる代わ

りに自身が持つてる宝を見せてくれたり等、

今思い返せば生きているのが不思議な程の人生を過ごしてきた
そして、それらを使って紛争地域に行ったりなどして色々な人達を
救ってきた。

けど魔術の秘匿を無視して救ってきたせいなのだろうか。
魔術協会が俺を封印指定して、俺を捕まえるために行動してきた。
様々な手段を用いて魔術協会から逃げながら正義の味方のような行
動をしてきた。

「はあ、はあ、はあ」

しかし、組織対個人では限界があった。
今、俺は致命傷を負っている。

ある紛争に参加して俺はいつも通り人を救おうとしていた。
しかし、魔術協会も俺を捕まえるためにその紛争に参加してきた。
俺はそれを知ってはいたが紛争に巻き込まれている人達を見捨てる
わけにはいかずそのまま参加した。

紛争が収まりそうになったとき協会側は焦ったのだろう。
最初は戦闘の流れ弾みたいにして俺を狙っていたのだが全く効かな
いとわかり直接挑んできた。

青子さんとの模擬戦のおかげで苦も無く倒せると思っていた。
けど、魔術の流れ弾が無関係の人に当たりそうになった。

俺が庇うことでなんとか当たらずにすんだが当たり所が悪く致命傷
になってしまった。

それでもなんとか魔術師を倒すことができた。

そして現在、協会側からの追撃を逃れるため痛む体を無理して逃げている。

「はあ、はあ、これは、まずいな…」

喰らったのが攻撃魔術と呪いの魔術の融合型の魔術だったためただでさえ致命傷なのに呪いのせいで悪化している。

アヴァロンのおかげで傷は塞がってきたのだが先程の戦闘で魔力がほとんど残っていない状態で使ったため皮膚が塞がっただけで消費した血と抉れた臓器の修復ができていない。

まあ、その場で死んで協会側に遺体を回収されるよりはまだマシなんだが…

「さて、この後どうしようか…」

とりあえずこの後の短い間の俺の行動だが選択肢はある。

このまま死ぬか、遺体を残さないようにするか…

どっちにしる俺が死ぬことに代わりはない。

死ぬのか…

「けど、庇って俺が死ぬ代わりに助けることができたんだ。

正義の味方として充分な死に方だと思う」

救えない命はあった。

それに悔やむ気持ちもある。

けど、それが行き過ぎてアーチャーは摩耗してしまったのだ。

俺は遠坂や橙子さん、両義さん、シエルさんなど色々な人達から同
じようなことを教えてもらった。

『救えない命は確かにあるだろう。けど、行動したからこそ救えた
命がある。』

それらの命を蔑ろにして救えない命ばかり見てはいつか摩耗
してしまう。

過去を振り返るな。現実^{いま}を見る。』

それを最初に言われたとき、俺は理解できなかった。

けど、摩耗した自分、アーチャーを見たことがある俺はすぐに理解
できた。

その教えを心に刻み、色々な人達を救った。

ああ、俺は救えたのか…

そう思うだけで俺の心は摩耗することはなかった。

だから俺はアーチャーのように後悔していない。

ただ、ひとつ…

「俺は、正義の味方になれたかな？ 遠坂」

遠坂…

「結局、面と向かって言えなかったなあ……」

そう、唯一心残りなのは遠坂にまだ告白してない。

「ごめんな遠坂。

迷惑ばかりかけて」

「愛してる、遠坂……」

そうして俺は遺体を残さないようにするために投影して自爆しようとした時、

「……なに恥ずかしい台詞を言いなが死のうとしてんのよ」「

え？」

声をした方向を見ると

そこには顔を真っ赤にして立っている遠坂がいた。

「遠坂？」

「まったく、あんたを助けようとして来たらいきなり告白だもの。
…まあ、嬉しかったけど」

「え？」

「な、なんでもないわよ！！
とりあえずあんたを助けに来たの！！」

最後なにか言っただけで声が小さくて聞こえなかった。

「士郎。いまの自分の体がどうなっているのかわかるよね？」

「ああ、傷は皮膚が塞がっただけで中は致命的な状態。
さらに呪いによって魔術や宝具による治療が効きづらくなっている。

それ以前に宝具を起動する為に必要な魔力が全く無い」

「そう。そして助かるには」

「新しい体に移るしかない…」

「そう、空の入れ物に入るしかない」

確かに、いまの状況から助かるにはその方法しかない。
けど…

「遠坂は魂を別の入れ物に入れる魔術ができるのか？」

「できるわけ無いでしょう。」

私の専門は第二魔法、人形師のようなことができるわけ無いでしょう」

「それじゃ、どうしようもないじゃないか」

「大丈夫よ。人形師がこういうことが起きるのを予想してあらかじめ準備していたらしいわ」

「どういうこと？」

「まず、士郎の体を作る。」

これはまあ人形師だから普通にできたらしいわ。

けど、次からが問題だったらしいわ」

「魂を人形に移す…」

「そう。その場に本人が居合わせたらいいんだけどそう都合よく目の前でそういうことが起きるわけじゃない。

だから、その場に居なくてもできるような体に細工しておいたらいいわ」

細工？

けど自分の体を解析してもそんなものは見つからないんだけど…

「見つかるわけ無いでしょう。

魔術で見つかるような細工だったら他の魔術師にわかってしまうでしょう」

確かにそうだ。

せつかく生き延びられるように細工しておいたのにバレてしまったては意味が無い。

「細工の内容は曰く、士郎が死んでしまった場合自動的に人形に移るとのことらしいわよ。

あの人形師は自分の体の予備を作っておいて死んでしまったらその人形に移るといふのをやってるからそれを他人の体に置き換えて

やったらしいわよ。

ただ、自分以外でそれを行ったことがないから少し苦労したらしいわよ」

つまり…

「俺が死んだら」

「今私が持つてるこの人形に移るというわけ」

といいながら遠坂が持っていた荷物の中から人形が出てきた。

「燈子さん…」

「そうそう、人形師から士郎に伝言があるわ」

「え？」

「『これで貸し借りは無しだ。自分の体を大切にするようにしろ』
だつて。」

あんだ、あの人形師から貸しを作るなんて… いったい何をしたのかしら？」

「はは……」

「まあ、いいわ。

これで助かることができる。けど……」

「大体予想できるよ。

協会が俺を捕まえようと必死になりはじめたんだろ？」

「……」

やはりそうか……

そしてこの場に遠坂がいるということは遠坂も協会から命令が来たのだろう。

「今、大師父とミス・ブルーがなんとか時間を稼いでるけどそれも時間の問題。」

恐らく今までのようなことはできないわ」

「そうか……」

ただでさえさっきまでの状況で俺は死にそうになったのだ。

今回は燈子さんが準備してくれたからよかったけどそれが何度もできるとは限らない。

確かに燈子さんのようにひっそりと生きていればまだ生きていける確率が高くなる。

けど…

「だからと言っておれはこの生き方を変えることはしない。それをしてしまったら俺じゃなくなる」

「…はあ、言うと思ったわ」

俺がそう言つと遠坂は呆れながら言った。

「私が第二魔法を完全に完成していたら確実に他の世界に飛ばせるのに…」

「え？」

「私の専門はさっき言った第二魔法でしょ？」

けど、まだ私は穴を開ける程度のことしかできないのよ」

「ちなみにその穴で他の世界に行ける確率は？」

「よくて二割ってところかしら？」

「そうか…」

「どうする？それでも行く？」

必ず行けるとは限らない。

けど、それでも魔術協会が本気で俺を殺そうとしてるこの世界に
いるよりまだましだ。

なら、俺がとる方法の一つ。

「それでも、俺は他の世界で正義の味方を続けたい。

それが俺の生き方だから…」

「…そう。」

遠坂は呆れてはいるが微笑んでいた。

「わかったわ。

穴を開けるために欠陥品ではあるけど宝石剣があるからこれを使
って穴を開けるわ。

あとは」

「俺が死んで、体をこの人形に変えたらいいんだな？」

「ええ、そしてその後私が穴を開くからそれに入れればいいわ」

「わかった」

そして、俺は人形に移ろうとして死のうとした瞬間

「はい、ストップ。

おまえら何大博打しようとしてんだよ」

「「え?!」」

声ができる方向に向くとそこには

言峰が着ていた服を白くした服を着た両義さん似の何かが居た。

「まったく、完成されてない状態で無理やり第二魔法やろうとするなんて…」

「ないわほんと」

「あなた、誰？」

「というか人間？」

「ああ、やっぱり気配で大体は勘付くか。そうだよ。俺は人間ではない。」

「簡単に言つとこの世界の神だ」

「「は？」」

俺と遠坂は自称神が言ったことに困惑した。

いや、確かにアルクエイドさんとかアルトリュージュさんのように人間じゃない気配がしているのはわかる。

けど、だからと言って…

「あなたが神だって言ってもそれを信じれるほどの証拠がないと信じれないんだけど」

「まあ、確かにそうだな。
んじゃあ

これで信じてくれるよな？」

と言うとさっきから感じる痛みと不快感が消えた。
まさかと思い自分の体を解析してみると

「傷と呪いが、消えた…」

「え?! 嘘?!」

まさか、魔術をする素振りも見せず無詠唱で治療したっていうの
!?!」

「出来るに決まってるだろ。
俺は神なんだから」

「「…」」

「これで信じてくれたかい？」

信じないわけにはいかないだろう。
無詠唱で、しかも何の素振りもせず致命傷の傷と魔術や宝具を使っ

た治療を妨げる呪いを一緒にしかも一瞬で消したんだ。
そんなことができる奴なんて聞いたことがないしそんな魔術絶対存
在しないだろ。

現に俺より魔術に詳しい遠坂が俺と同じ反応しているんだ。
俺と同じ考えなんだろう。

「…まあ、実際に見せてくれたんだから信じるしか無いんだけど。
で？神様が何の用でしょうか？」

「何の用かだつて？
簡単だ。

そんな博打で衛宮士郎を他の世界に飛ばされる前に俺が確実に成
功する方法＋プレゼント付きで助けに来たんだよ」

「「…は？」」

神が言ったことに俺と遠坂はまた困惑した。
神様が俺を助けに来た？

「なんでさ？

俺、神様のために何の良いこともしてないんだけど」

「俺は『平等』という考えを元に行動している。

神というのはその世界で生きている全ての命を考えなければなら
ない。

他の全ての命に対して害を与える存在にはそれ相応の報いを、他
の全ての命に対して幸福を与える存在にはそれ相応の報奨を。

それが俺の『平等』についての考えだ。

だから衛宮士郎。

命を救い続けた正義の味方にはそれ相応の報奨を貰える権利があ
る」

「ちよつとまってくれ。

確かに俺は命を救い続けた。

けど、救ってきた人からその分の報奨をもらってる。

これで充分平等にはなるじゃないか」

「はあ。

お前は自分がどれだけのことをしてきたのかまだ自覚がないのか

…」

「？」

俺が一人言われたことに疑問を持っていると

「ああ、なるほどそういつつとね」

遠坂が納得していた。

「どいうこと？」

「お前は命を救う毎に貰う対価と救った命が釣り合っていないんだよ」

そんなはずはない。

あの聖杯戦争が終わった後遠坂は俺が対価を貰わずにやっていくのはおかしいと言われて貰うようにと聞き飽きるほど言われた。

そういうのもあって俺はそれ以降助けた人からは対価を貰っている。だから、別におかしいことはないんだけど…

「それじゃあ、一つ聞いてみたいんだが。」

「お前はいつもどんな対価を貰ってる？」

「助けた人が家持ってたら一泊してもらったり、情報を貰ったりとかかな？」

「「はあ…」」

そういうと遠坂と神は呆れながら溜め息を吐いた。
「なんでさ？」

これくらいの対価なら別に大丈夫だと思うんだが…

「衛宮士郎。」

命の重さはその程度の対価で釣り合うのか？

お前が思っている命の重さはその程度なのか？」

「そんなわけっ！」

「そんなわけないよな。」

たくさん命が目の前で消えたあの大火災から切嗣によって救われ、切嗣の思いを受け継いで全ての命を助けると決めたお前がそんなこと思っわけ無いよな？

だからこそ、お前が貰った対価と命の重さが釣り合っていないんだ」

「どっということだ？」

「釣り合っていないということはつまり、まだ対価の貰い残しがあるんだ。」

そして、さっき言ったとおり、俺の行動原理は『平等』だ。

その貰い残し分をお前にあげるために行動しているんだ」

「その貰い残しがさっき言った確実に他の世界に飛ばすのとプレゼントトってわけね」

「そついつことだ」

「ああ、そうそう。」

俺はもう対価を貰ったからそんなことしないでいいっていう意見は却下するから」

言おうと思ったことを言われた。

「さて、時間がないからすぐにやらせてもらう。

まずは魂をその人形に移すために殺さないといけないんだがその前にその人形を改良させてもらおう」

「改良？」

「まあ、改良内容はあとで自分で確認してくれ。

ぶっちゃけるとその改良ももうし終わったんだけどね」

「…さすが神様、と言ったところね」

正直言ってどんな改良をされたのかわからないから自分の体をあの人形に変えたくないんだけど…

「あとはその人形に服を着せてるつと、よし終了」

人形の服装を見るとそれはまるっきりあのアーチャーと同じ服装だった。

「ちょっとまで、何故にその服？」

「んゝ、なんとなく空気を読んで」

どんな空気だよ…

「さて、ではその人形に移ってもらおう」

「え?!もう?!ちょっと!」

「はい、ドーン」

と神が言いながら指パッチンをするのを見ると同時に意識がなくなった。

そして、俺はすぐに意識を取り戻したのだがすぐに体に違和感を感じた。

その違和感を探すために自分の体を解析してみた。

（――同調、開始）
トレスオン

身体詳細……大体変わらず。ただ肌の色、髪の色など魔術使用による身体的副作用改善。

身体機能……変わらず。ただ鍛錬することによる身体機能上昇率二倍増。

魔術回路……全二十七回路使用可能＋ α 、投影使用可能、強化使用可能、真名解放可能、壊れた幻想使用可能、無限の剣製展開可能。
魔力量……五倍増。（！！！！）

「ちょっとまで、なんで魔力量が五倍も増えてるんだ？」

「俺からのプレゼント。」

あ、あと今の状態では魔術回路の数は変わらないけど鍛錬するうちに数が増えて最終的には二倍になる予定だから」

「よかったわね士郎。」

これであんたも人外の領域に確実に近づいたわね」

喜んでいいのだろうか？

まあ、身体機能が上昇しやすくなったのはうれしいけど…

「さて、次が本番だ。」

衛宮士郎、お前を他の世界に飛ばす」

「けど、どうやって飛ばすのかしら？

まさか第二魔法を使うつもり？」

「いや、そんなもん使うより確実に他の世界に飛ばせてなおかつ飛ばした先の世界に迷惑かけること無くいける方法だ」

「世界に迷惑を掛ける？

それって抑止力のこと？」

「そうだ。」

元から存在しないものがいきなり世界にくるんだ。

その世界からしてみれば世界の秩序を乱す存在だろう。

その存在を世界が見逃すわけがない。

恐らくというか確実に世界は抹消するために動くだろう。

その抑止力を最小限に抑えるための方法だ」

「なるほどね。」

どちらにしろ確実に世界が動くならその力を少しでも弱らせるためってことかしら？」

「そういうことだ。」

だからこそ、衛宮士郎にいろいろプレゼントしたんだ。
その抑止力に対抗できるために」

抑止力。

別名世界の掃除屋。

あのアーチャーがその存在になったらしいがつまり最低でもアーチャーレベル、英霊以上の強さを持つ者が来るっていうことか。

…まあ、アルクエイドさんみたいな真祖の吸血鬼よりは弱いだろう、多分…

「その方法だが、簡単に言うと飛ばす先の世界に衛宮士郎、お前が召喚されるということだ」

「召喚？」

「言うなればこちら側が送信側、飛ばす先の世界が受信側になるということだ」

「ああ、なるほどね。」

仮に飛ばす先の世界に召喚魔法というのがあった場合、世界から見たら召喚魔法をしているという認識になるということね？」

「そ。」

それによって世界からの干渉を防ぎ、なおかつ使い魔という形にすることで結果的には邪魔な存在ということで抑止力は働くけど力は弱くなるということさ」

「なるほど。」

ちなみにその方法を使うことによってどのくらい弱くなるんだ？」

「簡単に言つと死徒二十七祖の最強クラスからアーチャーくらい」

「「うわぁ……」」

「だからもし仮にさっきおまえらがしようとしていた方法で成功していた場合、そんな奴といつか戦うことになっていたというわけだ」

…それ、もう確実に死んでいたな俺。

「召喚陣は、おまえらが知っているこの陣でいいよな？
ぶっちゃけ陣の種類はなんでもいいし」

と言いながら出した召喚陣は…なんだろう？
見たことはあるんだけど…

「懐かしいわね。

あの陣を使うなんて、空気を読んでいるのかよくわからないわ」

「遠坂はわかるのか？」

「士郎だってわかるでしょう？ってそうだった…。

士郎は正規の方法で召喚していないからわかるわけないか」

「？」

「この陣は聖杯戦争でサーヴァントを召喚するときに使う陣よ」

「へえ」

セイバーが召喚されたときにでてきていたあの陣か…
それは覚えているわけないよな。

一瞬しかでてなかったし。

「では衛宮士郎。

この陣の上に立ってくれ」

「わかった」

神にそう言われたので俺は陣の上にたった。

「もう少ししたらその陣が光りだす。

それは受信側が召喚するために詠唱を始めたということだ。
それまで遠坂嬢と暇を潰していたらしい」

と言うと神は歩きながら気配を消した。

このまま俺達を放っておくことはしないと思うから近くにいるとは思うけどどこにいるのかはわからない。

「…まあ、いいか」

というわけでいま遠坂とふたりつきりになったわけだけど…

「…」「」

どうしようか…

この方法が成功したらもう二度と会うことはないのに俺は何を話すか迷っている。

「…っぷ」

と考えていると遠坂がいきなり笑い始めた。

「どうした、遠坂。」

いきなり笑い出して」

「ごめんごめん。」

今士郎が思っていることを想像したら笑っちゃって、ふふ」

「失礼だぞ、遠坂!!」

「だから謝ってるでしょ!!」

もう会うことができなくなるのに喧嘩してしまっただけで、これが俺らのいつも通りの会話なんだと思う。

「ははは」

「ふふふ」

ああ、こういう雰囲気ももうなくなるのか…

「ありがとな、遠坂」

「え？」

「もし遠坂がいなかったら俺はアーチャーのようになっていたと思う。」

傍に遠坂がいたからこそ自分の理想に絶望すること無く生きていけたんだと思う」

「…」

だからこそ、感謝と自分の思いを伝え忘れないように万感の思いを込めて伝えたいと思う。

「遠坂。」

ありがとう。…愛してる」

「っ！！」

そう言つと遠坂は顔を真っ赤にして、

「…私もよ、士郎。

愛してる」

泣きながらそう返事してくれた。

ああ、やっと、やっと伝えることができた。

しかも遠坂が同じ思いだと知って男としてこれほど嬉しいことはない。

と、同時に陣が光りだした。

「始まったか。

最後に言つが、あっちの世界にいたら目の前に人がいると思う
がそいつがお前を召喚した人でマスターになる人だ。

間違つても殺すなよ」

「わかった」

とさっきまで気配を消していた神がいきなり出て来て説明し始めた。

「ありがとな、神」

「それを言うなら今まで良い事をしてきたお前自身に言いな
やってきた行動のおかげで今があるんだ

お前のやってきたことは誇っていいことなんだ」

…ああ、そうか。

確かに救えなかった命があった。

けど、同時に俺が行動したからこそ救えた命がある。

誇って、いいんだな…

光が強くなった。

もうそろそろ詠唱が完了するのだろう。

「それじゃあ、遠坂」

「グスッ、何？ 士郎？」

まだ真っ赤になりながら泣いている遠坂にこの言葉を送って行こう。

「行ってくるよ」

「…いつてらっしやい。」

「元気でね」

そして俺はこの世界からいなくなった…

あまりにも眩しすぎて目を閉じていたが、光が弱くなったのを感じて目を開けてみると、

目の前に、美少女がいた。

神が言ったことを信じると目の前にいるこの女の子が俺のマスターなんだろう。

そう思っていると目が合った。

俺は自然と思ったことを口に出した。

「問おう。あなたが「俺」「私」の「マスター」「サーヴァント」か」

そして、この言葉がこの世界で生きる俺の第二の人生の始まりであった…

終わりの始まり（後書き）

ご都合主義乙。

しかも後半グツチャになってしまった…

誤字・脱字、設定に対して何かありましたらご指摘ください。

従者の力（前書き）

遅くなりまして本当にすいませんでした！！

リアルでいろいろありすぎて更に戦闘描写を考えすぎて書いて書きなおしてを繰り返していました。

しかもこんなに遅くなったのに全く進んでいません…

登録してくれているみなさん、本当にすいませんでした。

従者の力

side 士郎

どうやら召喚に成功したらしいのだが、ここがどこなのか、どういう世界なのかわからないので状況を説明してもらおうよう促した。とりあえず中で話そうということになり今代表者の部屋に向かっている。

ただ一つ、疑問に思うのが

「ここ、どこ？」

建物がどう見ても日本の建築物には見えないんだけど……」

とつぶやくほどここがどこなのか気になる。

日本らしい建物が全く見当たらないからつい独り言を言ったのだが、マスターはその独り言が聞こえたらしく答えてくれた。

「ふふ、まあそう思うのは仕方ないわね。」

ちなみに、ここは日本の学園都市、麻帆良学園よ」

「え?! ここ、日本なのか!」

おれはここが日本だっていうのに驚いた。

俺の反応はやはり予想通りだったのか皆笑っていた。

そついうやりとりをしているとここの学園の長の部屋に着いた。

「ふおっふお、さてまずは互い自己紹介をしようかの？」

僕はここの学園長で関東魔法協会の理事長である近衛近衛門じゃ」

「僕はここの学園の教師と広域指導教員をやっているタカミチ・k・高畑だよ。

よろしく」

まず、学園長とメガネを掛けている男性が自己紹介してくれた。

学園長は見た目が人間には見えないけどさすがにそれを言うのは失礼なので言わないようにした。

高畑という人は雰囲気からかなり強いと思えた。

「私の名はエヴァンジェリン・AK・マクダウェルだ。

真祖の吸血鬼だ」

「茶々丸です。

先ほど紹介されたマスターの従者で、ガイドノイドです」

次に、金髪の小さい女の子と見た目がロボットっぽく見える二人が

紹介された。
ていうか真祖の吸血鬼って!!

「真祖の吸血鬼!？」

「そうだが？」

ああ、心配するな。別に人間を吸血しても魔法で治療できるから大丈夫だ

それに、忌々しいが私は封印されている。
仮にしようと思ってもそこにいるタカミチにやられるだけだ
ていうかそれ以前にできない」

「そうか…」

俺がいた世界の真祖は吸血すると無条件で死徒化するから警戒したがその心配は必要なかった。

封印か…

なら、別に気にする必要はないな。

従者の茶々丸は、気配が人間ではないけどマクダウェルみたいな人外の気配もないから疑問に思っていたがまさかロボットだとは…

こっちの世界は技術力が進んでるなあ…

そして、

「どうも、私はあなたのマスターにしてエヴァの従者である棚町京

です。

これからよろしく願います」

優雅に俺に挨拶した女の子がおれのマスターらしい。

歩き方や仕草を見ると一般人レベルにしか見えないのだが底知れぬ
雰囲気から恐らく何かしらの能力に目覚めたばかりなのだろう。

「自分の名前は衛宮士郎です。

この世界とは違う、別の世界から来ました」

「さて、お互い自己紹介も終わったからまずはこちらの世界について説明しようかの。

質問とかはひと通り説明し終わってからでの」

「わかりました」

とりあえず、学園長からこの世界の魔法について説明してくれた。
この世界には2つの世界があり、今いる世界が『旧世界』、そして
もう一つが『魔法世界』。

詳しくは教えてもらえなかったが魔法世界はその名の通り魔法が大
っぴら使われている世界らしくまた住んでいる住人も獣人は勿論竜
種などまさにファンタジーな世界らしい。

そして、次に教えてもらえたのがこの世界に存在する魔法について
だった。

教えてくれたことを纏めると、俺がいた世界という魔術がこっちの

世界でいう魔法だった。

ただ、こちらの世界の魔法は俺の世界の魔術より大規模で威力が大きいのが主流らしい。

俺の世界の魔術でもあるにはあるが、その前に準備をしなければならなかったため詠唱するだけで発動することができるわけではない。

この世界の魔法使いに対する戦い方を何とかしないと…

その後も、この世界に存在する大きな魔法組織や、関東と関西それぞれにある協会、関西で発達している陰陽術や剣術の名門神鳴流など様々なことを教えてくれた。

「まあ、こんなところかのう。

何か質問はあるかい？」

「もし、一般人に魔法などがばれてしまうとどうなるのですか？」

「もし魔法などがバレてしまった場合、その場を治めるようなことを言ったり、最悪記憶消去の魔法を使うよ。

あと、ばらしてしまった魔法使いなどはオコジョになるんだ」

「はあ、オコジョですか…」

俺はそれを聞いて、あまりの軽い処置に驚きを通り越して呆れてしまった。

まあ、その分動きやすいから俺にとっては嬉しいことなんだが…

「さて、この世界についての説明はこれでいいとして。次はお主がいた世界について説明してもらえるかのう？」

「あ、はいわかりました。

簡単にですけど自分がいた世界について説明します」

俺もこの世界と自分がいた世界の違いを説明した。

俺の世界にも『魔法』使いはいるが存在する『魔法』は五つしかなく、そのうち存命する『魔法』使いは四人しかいない。

後は魔術と『魔法』の違いについて、魔術協会についてなど説明した。

「ちなみに、もし魔術の秘匿を破ってしまったら問答無用に殺されます」

「…なんとも血生臭い世界だな」

「なのでそれぞれの魔術師は秘匿を最優先にするので他の魔術師について調べない限り全くわからないのです」

「ちなみにそちらの世界の『魔法』とはどんなのがあるのかのう？」

「第一から第五魔法あるなかで自分がわかるのは第二と第三魔法しかわかりません。」

まず、第二魔法ですがこれは並行世界の観察、移動です。次に第三魔法ですがこれは魂の物質化、つまり完全なる不老不死を実現する魔法です」

「完全に魔法の内容が違うな。実現できる自信がないな」

「大まかな説明は以上です」

「うむ、ちなみにお主は何の魔術ができるのかの？」

「自分は解析と強化、投影ができます」

最大の切り札である無限の剣製は伏せておく。

さすがにまだ出会ってすぐの人達に教えるのはありえないことだから。

ただ、マスターである棚町さんにはあとで教えるけど。

言いながら考えているとマクダウェルさんが質問してきた。

「それらはどついう魔術なんだ？」

「解析は物質の構造把握、強化は存在意義を強化させるという魔術で例えばナイフなら切れ味、食材なら栄養度が上がるということ。投影は簡単に言っていると魔力を練って物質を再現するという魔術なんだ。」

ただ、投影したものは本物のワンランク下になるのは確実にさらに魔力で作ったものだから数分で消えてしまうんだ」

「そうなるとお前が持つてる魔術はそんなに強くないのか？」

「普通はね。」

ただ、俺の場合普通の魔術師とは違って投影した物は俺の意志で存在させるか消滅するか決めることができるんだ」

「…それはすごいのう」

俺の属性はまだ教えない。

あまりにも特徴的すぎるからさすがに言えない。
学園長が感嘆と言つとマスターが質問してきた。

「その投影つて例えば今見本となる物を渡せばそれを複製できるのよね？」

「ああ、見本となる物を見せてくれたらできるよ」

「じゃあ、これを複製してみて」

と言って棚町さんが俺に渡してきたのは殺人貴が使っていたナイフによく似ている物だった。
ただ、ナイフというだけで中身が何もないからよく似ているだけだろう。

「わかった」

橙子さんの人形と神からのプレゼントによる魔術の影響を確認するには少し物足りないけど一応確認にはなるから本気でやってみよう。
渡された直後に無意識に解析したが本気でやるからには細部まで解析する。

解析できたらいいよ開始だ。

――投影、開始

「「「おおお……」」」

「ほつ……」

高畑さんと学園長と棚町さんは感嘆の声をあげマクダウェルさんは

感心するように声を上げた。
そして俺は

「…なんだこれ」

あまりの自分の性能の良さに驚いて思考が鈍くなっている。
いや、確かに細部まで解析して本気で投影した上に自分の体の性能
が上がっている状態だから前の俺より精度は上なのはわかる。
けど、だからといって限りなく本物に近いのができるのはおかしい
だろ。

仮にAランクを70以上、Bランクを69→50にしよう。

前までの俺がAクラス70を複製しようとしたらワンランク下のB
クラス50ができていた。

しかし、今の俺はAクラス70を複製しようとしたら恐らくBクラ
ス69・99999とワンランク下だけど限りなく本物に近い物が
できる。

現に今できているナイフがまさにその状態だからだ。

しかも魔力消費量が通常の約1/5と訳がわからない。

ていうかここまで性能よくしないと倒せない世界の抑止力って…

ああ、考えたくない。

「すごいのう。」

見た感じ限りなく本物に近いと思うんじゃないか」

「先刻おまえが言ったことを踏まえると本物と比べるとわかるぐら
い劣化している物ができるとい話のはずなんだが。」

おまえが今複製した物は見比べてもどちらが本物でどちらが偽物なのかわからんぞ」

「まあ、そのかわり先刻言った魔術以外は三流どころか全然できないんだけどね…」

俺の特化型の属性のせいなのは解っているんだけどね。まあ、そこまで教えないけど。

「ふむ、よくわかった。

さて、衛宮殿のここでの扱いについてなんじゃが…」

いよいよ本題である俺のここでの扱い。

普通ならいきなり現れてきた侵入者を軟禁状態にして監視するとかとりあえず自由な状態にはしないと思うけど…

「お主は中学校の副担任と広域指導教員になってもらいたい」

「…なんでさ？」

俺は学園長の提案に驚いてしまっただけで敬語を抜かして返事してしまっただけ。た。ていうか本当になんて？

「ちょっと待ってください。
見ず知らずの自分がなぜ教師を？」

「まあ、落ち着きなさい。

理由はきちんと説明するわい。

確かに違う世界から来た人間をおいそれと自由にさしてたら部下が君のことを警戒してしまう恐れがある。

だからこの麻帆良で一番強いタカミチ君の下に置いとけば監視と
いうことにはなるじやろ。

あとは棚町君のクラスの副担任じゃったら従者として近くに
いれるからよいと思うんじや。

それに、お主自身儂らが警戒しないといけないことをするとは思
わないと判断したのじや」

「はあ…なるほど」

さすが組織のトップに立っている人はよく考えている。

今ここにいる人以外から見たら俺はマスターの従者ということしか
わからない。

そんな人間を普通に監視するぐらいなら一番強い高畑さんの下に置
くことで解決できるということか。
けど…

「俺教員免許なんて持ってないのですが…」

「そこは儂がなんとかするわい」

トップだからできることで無理やりにするということか…

「教員としてやる以上お主に担当教科を決めないといけないんじゃないが、何かやりたい教科はあるかのう？」

もうきまっていること前提で話を進めるんだ…

まあ、他に選択肢が無い以上それしかないんだけど…

「そうですね…英語か社会がいいですね」

「なるほど。」

英語はそこにいるタカミチ君がやっているから社会をやってもらおうかのう」

「わかりました。」

あと、質問なんですけど広域指導教員ってなんですか？」

「この学園はいい意味と悪い意味で元気な学生がたくさんおる。だからその分トラブルがたくさんでてしまうんじゃない。」

そのトラブルを指導という意味で沈静化するのが仕事じゃ。
まあ、要はパトロールをするということじゃ」

「なるほど…」

学園都市であり更に見た感じこの学園はかなり広いと思う。
さらにここは魔法使いもいる学園だ。

公共機関が介入されたら困るトラブルもあるのだろう。
それを教員であり魔法使いである人達がパトロールをして公共機関
が介入する前に解決をするということか。

「ただ、魔法使いであり教員である先生の数が足りんくてのう広域
指導教員の数が少ないんじゃ。

だからお主がやって欲しいのじゃ。

勿論副担任としての給料とは別に広域指導教員としての給料も支
払うわい。

やってはもらえないかのう?」

「やってもいいのですがその代わりとしてお願いしたいことがある
のですが…」

まあ、やってもいいんだけど今の俺の状況を考えたらちょっと条件
を出さないとできないよなあ…

「なんじゃい？」

「まず、自分の戸籍を用意して欲しいのとあと衣食住をお願いしたいのですが…」

「なんじゃ、そういうことは勿論かまわんぞい。
それ以前に戸籍がなければ教員にはなれないんじゃからお主が頼まなくてもやるつもりだったわい」

「ありがとうございます。
それで、あと衣食住は…」

「うむ。
先ほど言ったとおり教員をやるなら両方の給料が入る。
それがあれば困ることはなかるう。
そして、肝心の住む場所なんじゃが…」

「それについては私の家で充分だろう。
こいつの力がどんなものなのか気になるしな」

「だそうじゃ。
住む場所はエヴァの家でいいじゃろう」

「わかりました。

喜んでやらしてもらいます」

「ありがとう。

助かるわい」

これでここで生きて行くことができる。

みんな優しい人達で助かった。

「それで早速なんじやが明日からやつてもらいたい。

というわけで朝またこの部屋まで来るように。

あと、麻帆良における魔法使い達に紹介をしたいのでこの明日の夜
先ほどいた世界樹前の広場にきて欲しい。

詳しい時間はまた明日説明するわい」

「わかりました」

早速明日からか…

先生なんてやったことないから緊張するなあ…

「今日話すことはこれでお終いかのう。

何か質問はあるかい？」

「いえ、大丈夫です」

「それじゃあ、エヴァの家に行つてゆっくり休みなさい。
忘れずに明日の朝またここに来るんじゃない」

「はい、わかりました」

「話が終わったところで私の家に行くぞ」

と話が終わるとすぐに連れていきたいのかマクダウェルがそう言いながら動き始めた。

家の主である以上とりあえず付いていくしか無いと思い俺も動き始めた。

そうして付いて行くとある家の前で止まった。

「ここが私の家だ」

その家は木で出来ていているログハウスだった。
なかなか風情があつていいなあと思つていと

「私の家を見て感慨深く思うのは嬉しいのだが今は時間があまりない。

すまないが私に付いてきて欲しい」

「ああ、すまない」

なにやらやりたいことがあるらしくすぐについてきてくれと言われた。

何をするのか分からないがとりあえず言う事を聞くしか無いから大人しく付いて行った。

付いて行くと地下に着いた。

そこには両手で抱えないと持てないくらい大きいボトルが置いてあった。

その中にはなにやらリゾートっぽいのがあったが…
と考えていると

「ナンダ？マタアトラシイジュウシャカ？

ホントウニマルクナツタナ、ゴシュジンハ」

どこからか声が聞こえた。

けど辺りを見回しても人らしい面影がなくどこから発しているのかわからない。

「うるさいぞチャチャゼロ。」

何を連れてこようが私の勝手だろ」

「ベツニワルイイミディツタワケジャネェンダケドナ。
キリキザムアイテガフエテウレシイカラベツニイインダケドナ」

とマクダウエルがどこかに顔を向けながら話しているのでそこ顔を向けると。
人形が話をしていた。

「人形？」

「あまり驚かないようだな。
紹介しよう。私の最初の従者であるチャチャゼロだ」

「ヨロシク。
コンドオマエノチヲミセテクレヨ」

「ははは…。
衛宮士郎だ。よろしく…」

挨拶の内容からこの人形は相手と斬り合うことが好きらしい。
ていうかチャチャゼロの手に持っているのが包丁というのでもう確定した…

「エヴァ、先に行ってるよ」

「ああ、先に行って準備でもしていてくれ」

「わかったわ」

と言うと棚町さんはボトルの前に立って、
消えた。

「…なんでさ？」

「さて、とりあえずそのボトルの前に立ってくれ。
話はそれからだ」

「いやいや、少しは説明してくれても」

「さっさと立ってくれ。
時間がもつたいない」

と無理やりボトルの前に立たされると、

薄暗い部屋から変わって雲一つない青空の下にいた。

「…どう？」

「ここは私が作った別荘だ。
京もここにいる」

とあとからマクダウエルさんがチャチャゼロを連れて来た。

「別荘？」

「魔法で作った物だ。
ちなみに、ここで一日を過ごさないとここから出れないからな」

「え？じゃあ、明日どうするの？」

「最後まで聞け。
ただ、この一日は外では一時間しか経ってない。
簡単に言つと逆浦島現象だな」

「なるほど…」

体を休めるにはもってこいの別荘だな。
なんて便利な魔法なんだ。

「さて、今からお前の实力を見せてもらおう。
ただ、本気は出さなくていい。
雰囲気からしてお前が本気を出すと別荘が壊されそうなのでな」

「なるほどね…」

「あとは京の実践訓練を兼ねている。
恐らくというか確実に今の京ではお前の本気には勝てないからな」

「まあ、うん、勝てないだろうね」

見た感じまだ素人っぽいし。
けど、先刻も感じたけど素人のはずなのに雰囲気違和感を感じさせる。

この違和感は何なのかわかるかもしれない。
？

「今の？なんで今の状態ではってわかるの？」

「なに、貴様も戦ってみればわかる」

なにやら意味深な返答をしてきた。

「とりあえず、私に着いて来い。
訓練する場所に案内してやる」

と言うと何の柵もない橋の上を渡り始めた。
意外に高いなと思いつつ着いて行つた。

橋に繋がっていたもう一つの塔に着いた。

その場所に、

準備体操をしている柵町さんがいた。

ただ、

「ん？」

明らかに先刻と色々変わっている。

先刻の柵町さんは雰囲気違和感があっただけでそれ以外は素人に
しか見えなかった。

しかし、今の柵町さんはレベルが上がっている。
何かに似ている。

この感じは…

「私は準備完了よ。

衛宮さんはどうかしら？」

「え？ああ、大丈夫だよ。

いつでもいけるよ」

転送された状態のままの格好だからいつでもいける。

「そう。じゃあ、

戦いましょうか」

「！？」

棚町さんがさういうと一気に空気が変わった。
肌で感じるだけでわかる。

明らかに素人のレベルではない。

おかしい。

全くもっておかしい。

ただ、この感じは…

「構えなくてもいいのかしら？」

「あ、ああごめん」

とりあえず武器を構える。

とりあえず様子見を兼ねて黒鍵を両手で持てるだけ持って準備する。
この武器なら遠距離からも攻撃ができ、近距離でも攻撃ができる。
相手の実力を図るにはもってこいだろう。

「…なるほどね」

「どうしたの？」

「いえ、別になんでもないわ」

そう言うつと棚町さんはどこから出したのか鞘に納まっている日本刀を出した。

ただ、普通の刀ではないのがわかる。

解析してみても出来なかった。

まるで調べられないように守っているようにしているのか、とりあえず何かで防がれている。

「それじゃあ、

先手は貰うわ」

「!?!」

俺は咄嗟に左手に持っていた三本の黒鍵で左脇腹を守るようにした。すると、黒鍵に棚町さんの居合が当たった。

「ぐっ!!」

棚町さんは居合で攻撃した後そのまま俺の背後に移動した。思っていた以上に攻撃が重くて驚いた。

しかも、投影した後更に強化したはずの黒鍵が今の攻撃で罅が入っている。

「ふっ!」

背後にいた棚町さんは一息いれてなにかしようとした。

後ろにいるから何をするのかわからないが予測はできる。

恐らく振り向きながら刀で攻撃するだろう。

俺はその場ですぐにしゃがんだ。

すると頭の上から風切音が聞こえた。

避けるのに成功したと思いながら反撃をする。

体を思いっきり反時計回りに振り向きながら左手の指に挟んである三本の黒鍵で攻撃した。

「くっ!!」

棚町さんは地面が割れるほど力を出して後方に避けた。

俺は次の行動にでた。

そのまま振り向く力を利用して右手に持っている三本の黒鍵を後方に下がった棚町さんに投擲した。

投げた瞬間の棚町さんの態勢は片足が地面に着いていた。

思いつきり後方に下がったため投擲した黒鍵が当たる頃でもまだ態勢を完全に戻すのは厳しいだろう。

恐らく地面を滑っているか止まるかのどっちかだろう。

しかし、棚町さんがとった行動はどちらでもなかった。

棚町さんは片足が地面に着いた瞬間右に側転した。

黒鍵が手元から離れた瞬間にしたため投げるのをやめることができずそのまま棚町さんに当たること無く飛んでいった。

かわりに左手にある黒鍵を俺の予測した側転した先に投擲した。

棚町さんはそのまま側転すると思ったが左手が地面に着いた瞬間そのまま上に飛んだ。

確かにそのまま側転してしまうと両足が地面に着いたときに黒鍵があたってしまうのでそこから更に防御や回避行動をとる暇がない。

だから上に飛ぶしかないのだが…

それは予測の範囲内だ。

そう、俺は投げながら行動していた。

棚町さんが飛ぶだろうと予測していたところにい直線に走っていた。

そして棚町さんが飛ぶ瞬間に俺も飛んでいた。

棚町さんは俺の行動を見て驚いていた。

そりゃあ驚くだろう。

気付いた時には自分の腹に俺の右手が当たっていたのだから。

「ぐうつ!!」

体がくの字になり呻き声を挙げながら地面に吹っ飛んでいった。ちよつと本気で殴っただけなのだが地面にぶつかりと少し陥没した。

…あれ？

いや、確かに身体強化の魔術をかけた状態で殴った時の強さを確かめるために右手に黒鍵を投影して投擲せずわざわざ殴りにいったのだが…

まさか地面が陥没するとは思わなかった…
ていうか無事なのだろうか。

と心配していたら、

「いたたた…」

と棚町さんが少し痛がりながら左手でお腹を押さえながら立ち上がった。

ただ、痛がっているだけで戦闘に支障はきたさないようだ。

「ああ、やっぱり厳しいわね。

さすがに刀を抜いただけでは全く勝てる気がしないわ」

「抜いただけ？」

「この刀には名前があり同時に意思もある。

刀から名前を教えてくれるということは持ち主を主として認められたということになるわ。

そして主がその名前を言うことによって形が変化し、それぞれ特別な能力が追加されるようになる。

それを『始解』と言うのよ」

「つまり、その始解とやらをやるとその刀の形が変化して更に能力がプラスされるというわけだね？」

「そう。

まあ、まだ使いこなせてないから仮に使っても衛宮さんには勝てないと思うわ」

使う本人がそう言うからにはそれが事実なんだろう。

使った瞬間に相手を即死にするという反則能力でもなさそうだし。なら大丈夫だろう。

「さて、それじゃあ

使わせてもらおうわ」

瞬間、更に空気が重くなった。
正確には棚町さんからではなく持っている刀からプラスで重くなったようだ。

「起きろ、――”紅蓮”」

言いつと持っていた刀、『紅蓮』は光り始め徐々に普通の日本刀から形を変えた。

鍔がなくなり主の手を守るように柄の前まで刀が伸びた。

そして光が消えると『紅蓮』という名の通り刀全体が赤々と燃え盛るような色になっている。

色と刀の名前から判断すると恐らく火を主力とした能力かもしれない。

けどそう判断するのは速過ぎると思う。

現に俺が知っている宝具で名前と形から能力を判断できない物もある。

少し様子見をしたほうが得策か。

「んゝこれでもまだなのね…」

「何が？」

「いいえ、こちらの話。」

それじゃあ、続きを始めましょうか」

side 京

「はあ、はあ、はあ」

始解をしてから約十分くらい経って俺は霊力が切れたため地面に転がっていた。

結局始解をしても土郎に勝つことは出来なかった。

ただ、黒鍵以外の武器を投影させることができたので良としよう。
一番見たかったあの双剣が見れなかったのがとても残念だけど…

「なあ、マクダウエルさん」

「エヴァでいい。」

京は私の従者である以上お前も私の従者であることに変わりはない」

「じゃあ、エヴァ。」

棚町さんって最近になって戦い始めた？」

「そうだ。」

「厳密に言うなら約一週間くらいか」

「一週間でこれほど動けるのか……
すごいなあ」

まあ、たった一週間でここまで動けるのは俺から見てもおかしいと言える。

さすがセイバーさんが持っていたスキル『直感』。
まじチートだろ。
と考えると士郎が俺に近づいてきた。

「お疲れ。」

「よく頑張ったよ」

「せめて服に傷をつけるくらいはしたかったわ」

「……まだ余裕ありそうだね」

苦笑いしながら俺に手を差し伸べてくれた。

「ただ強がつてい……」

おれは手を掴もうとした瞬間、

掴めずそのまま前に倒れた。

「・・・！！！」

「・・・！！！」

くそ、起き上がるどころか…意識が…

俺はそのまま意識を失った…

従者の力（後書き）

紅蓮の能力はもう少しあとでお見せします。
感想などお待ちしています。

夢の中（前書き）

大変遅くなりまして申し訳ございません…

とりあえず、生きてます。

遅くなった理由はレポートとかレポートとか…

まあ、言い訳です…

しかもまったく進んでいません。

この小説を登録してくださってるみなさんは本当にすいませんでした。

夢の中

そこは『分裂』する世界。

そこは『歪曲』する世界。

そこは『死』が溢れている世界。

三つの世界が入り乱れていて、何を基準にしているのかまったくわからない世界の中、俺はただ彷徨っていた。

どれだけ時間が経ったのかここに居続けてもいいのか全くわからない。

ちなみに精神体が彷徨っているため今の体は男だ。

「さて、どうすればいいんだ？」

「私と話をして終わったらここから出られる」

と、俺の言葉に答えた声が聞こえたのでその方向を向くと

あの神様がそこにいた。

「んん？なんで神様がここにいるんだ？」

「君がなぜ倒れたのか、その理由を教えるのと謝罪するためだ」

なるほど、なぜこのような状況になったのかを説明してくれるのか。
それは助かる。
？謝罪？

「なんで謝罪？」

「簡潔に言つと

君に最後のプレゼントをしたらこんな結果になった」

「…なんでさ？」

ちよつとまで。

スキル『直感』についてこれる体に（エヴァ曰く）魔力量がナギと同等かそれ以上の量がありチートすぎる能力にオリジナルの斬魄刀にさらに従者までプレゼントしたのにさらにまた追加って…

「どんだけ俺を強くしたいんだよ。
インフレしすぎだろ」

「それにはちゃんとした理由がある」

「理由？」

「君はこの世界に転生された時点で世界にとっては邪魔な存在でしかない。

それが例え全く戦う力が無いとしてもだ。

つまり、

君は無条件で世界の修正力と戦わなくてはいけない。
力の有無関係なしに」

「なるほど。

要はその修正力に対抗出来るようにするためにここまでするとうことか」

「そういうことだ」

「うわぁ…」

逆に考えたらこれくらい力がないと勝てないくらい強いのかよ…」

「ちなみに衛宮士郎に関しては、召喚の手順をふんで来たから君ほど強い修正力は出てこない。」

「しかも、元居た世界の神から対抗出来るために色々プレゼントしてくれたりしいから心配する必要はない」

「へえ。」

「で？最後に貰える力って何？」

「ああ、それは

『内包する世界（World entailing）だ』

「『内包する世界』？」

「魔眼の名称だ」

「…は？」

「オイオイオイ」

「魔眼って、あの」

「代表的な魔眼と言えば、メデューサの『石化の魔眼』やあとは遠野志貴や両義式が使っていた『直視の魔眼』等だな」

「さすがに魔眼はちょっと強すぎるだろ」

「ちなみに、君に渡した能力と斬魄刀、魔眼、体これら全て全力で使いこなせてようやく修正力に勝つことができる」

「まじかよ…」

「ちよつとまで、交錯する…」

「まさか」

「その交錯する世界というのは今現在君が見ている世界だ」

「『直死』と『歪曲』と『分裂』の三つ。

その三つを世界と定義してその三つの世界が一つの魔眼に内包されている。

「そういうことか？」

「そついつことだ」

さすがに強すぎるだろ…

だって『直死』ってあの事だと思うし、『歪曲』ってふじのんが使っていたのと同じだと思うし、『分裂』はわかんないけど文字通りだったらやばいだろ。

「一つ質問したいんだけど」

「なんだ？」

「たしか、『歪曲』って超能力と魔眼の間で正確に言ったら魔眼じゃないはずんだけど」

「それは私が勝手に『歪曲』を魔眼として定義したからだ。だから、浅上が使っていたのとは別物として考えてくれ」

「わかった」

と神が質問に答えてくれるのと同時に体というか意識が薄れてきた。神が俺に説明すべきことは全部したのだろう

「あ、あと最後に渡しておく物がある。

その魔眼が周りにバレないようにするために専用のコンタクトレンズを作っておいた。

戦闘の時以外はできる限り付けておくように」

「さんくす」

神からコンタクトをもらうと視界が段々狭くなってきた。

「では、がんばりたまえ」

神のその言葉を最後に俺は意識を失った。

けど、最後に見た神の表情がほんの少し、ほんの少しだけ

悲しそうな顔をしていたような気がした。

side 士郎

棚町さんが倒れた後、異常がないかすぐに確認した。

茶々丸さんが測定した結果、意識を失っただけで異常がないことがわかった。

とりあえず寝かせれるように寝る場所まで運んだ。

茶々丸さんが看病するということになったので、俺はエヴァと模擬戦をした。

エヴァは結界により全力で戦えないので手加減しようと思った。しかし、その必要はなかった。

数百年生きてきて培った戦闘経験と習得している合気道柔術によってかなり苦戦した。

ただ、模擬戦をして俺とエヴァ両方に共通していたのが

柵町さんが気になって集中できないことだ。

俺はなぜ倒れたのか原因が気になり、（後で渋々教えてくれたことだが）エヴァは柵町さんは従者であるため心配していたらしい。模擬戦にならないので中断した。

とりあえず、柵町さんを寝かせている部屋は学園長室を少し小さくした位の大きさなので全員で看病しようということになった。

茶々丸さんが付きつきりで看病し、俺とエヴァも柵町さんを看病しつつ、エヴァに俺のこの世界の魔法の適正を検査してもらった。

結果はとてもひどかった。

俺の属性は剣であるためにこの世界のどの属性にも適さなかった。ぎりぎり闇が使えるくらいで、どんなに頑張っても上級魔法は使えずでも威力が約三分の二に下がってしまう中級魔法が限界らしい。

ただ、魔術回路をとおすと魔法がすぐに使えるのだが燃費が非常に悪く、攻撃魔法の中で一番初級である『魔法の矢』一本を出すのに干将莫耶を十回分投影したときに消費される量と一緒だった。

威力はただ出ただけなので測ってないが、エヴァ曰く、本来一本の威力はさつき私にパンチしてきたのと同じくらいだとのこと。

とりあえず今のところ戦闘には使えるレベルではないというのがわかった。

俺の予想ではすぐに意識が戻ると思っていたが、柵町さんは（別荘の日数で）五日経っても起きなかった。

そして、今六日目の朝を迎えた。

ちなみに俺は棚町さんが寝ている部屋で寝ている。

倒れた棚町さんがいつ起きるかわからないため、だったらここで寝たらいいということになって寝ている。

俺が起きたとき、茶々丸さんが起きて看病していた。

茶々丸さんはいつ休んでいるのか不思議に思うくらいずっと看病している。

エヴァは、今はまだ寝ている。

俺はとりあえず顔を洗ってくるかと思って部屋を出ようとしたが、

「入るぞ」

エヴァがいきなり入ってきたため出ることが出来なかった。

「看病しに来たのか？」

「まあ、気になったから来てみた」

と顔を背けながら言った。

素直じゃないなあ。

別にいいけど。

「で、様子はどんな感じだ？」

「まだ意識失ってる。
起き上がる素振りすらでないね」

「そうか…」

「気長に待つしかないな」

「原因がわからない以上そうするしかないな」

エヴァがそう言った瞬間、

「…ん、ん…」

棚町さんの呻き声が聞こえた。
振り返ると棚町さんが目を開けていた。

「京！！大っ…」

「京さん、大丈夫…」

「棚町さ…」

全員で棚町さんに声を掛けようとしたが、顔を見た瞬間啞然としてしまった。

棚町さんの目の色が銀色になっていた。
目から何か不思議な力を感じるということは魔眼なのだろう。

「おい、京。その目はどうした？」

「ん？ああ、目？」

またあの神からもらったわ」

「またか…」

どれだけ京を強くしたいんだ…」

「神？どういうこと？」

「ああ、おまえは知らないか。

実は京はこの世界の人間ではなく、お前と同じ違う世界の人間だったんだ」

「え！？」

それから俺はエヴァから柵町さんのことを教えてもらった。
なぜこの世界に来たのか、柵町さんの持つてる能力等々。
それを聞いてなぜ模擬戦であれほど戦えたのかようやく理解した。
ただ、柵町さんのことを聞いてもあの時感じた違和感がわからない。
あれはなんだろうか…

「…ということだ。」

ん？どうした、わからないところでもあったか？」

と考え事していたら説明が終わっていた。

「あ、いや問題ないよ」

「ならいいが…」

違和感の正体がわからない以上、無闇に言う必要はないな。

「まあ、神が考えていることも一理あると思うよ。」

抑止力を強くないように、召喚という方法で来た俺と違って柵町さんは世界から見たらいきなり来たんだ。

そう考えたらその抑止力に対抗できるようにするのは間違いないよ」

「確かにな…」

「ただ、使いこなせなかったから意味ないと思うけど」

「うっ…」

「というかこのままだと能力に振り回されて終わってしまうかもしれない。」

「さて、棚町さんも起きたことだし、ここから出る？」

「外の時間を考えたらちよっどいい時間だろう
京は動けるか？」

「体は問題ないわ。
出れるならでたほっがいいと思うわ」

「じゃあ、出ようか」

「ちよっと待って」

と出ようとしたとき、棚町さんが呼び止めた。

「どうしたの？」

「これから衛宮さんのこと、士郎って呼んでもいいかしら？
さすがに学校では先生って呼ぶけどね。

あと、私のこと京って呼んでももらえないかしら？

棚町さんだと他人行儀にしか聞こえないわ」

「別にいいよ。

じゃあ、京さん、これからよろしくね」

「ええ、士郎。

これからよろしく頼むわ」

棚町、いや京さんと俺は互いに名前を呼び合いながら握手をした。
主従関係としてではなく、まるで友が出来たかのような感じだった。

side 棚町

今、俺は別荘を出て、2・Aの教室にいる。

あの後、別荘を抜けて士郎は昨日学園長に言われた通り、学園長室

に向かつていった。

俺とエヴァと茶々丸は、まだ時間に余裕があったので朝食を食べてから学校に向かった。

教室に入って、俺は刹那がどういう行動をとるのか非常に楽しみだった。

が、さすが臆病刹那。

木乃香を何回もチラ見するだけで、行動にでることはなかった。

チラ見をする毎に木乃香が刹那を見てしまうので、目線が合うのが刹那はすぐに目を逸らしてしまつたため全く意味が無い。

これ、事情を知らない人から見たらただの変態にしか見ええないと思うんだけど…

と刹那を観察しているとタカミチが教室に入ってきた。

「ええ、今日からこのクラスに新しい副担任の先生が赴任されます」

「朝倉、どういうこと？」

「うっそ！私、そんな情報聞いたこと無いんだけど！！」

まあ、聞いたことあるわけがない。

だって、昨日違う世界から来たばかりだし。

少なくとも、俺とエヴァと茶々丸とタカミチ、あと学園長くらいしか知らないだろう。

「元気がいいねえ。」

とりあえず、もう入ってもいいよ」

とタカミチが教室の外にいる士郎を呼んだ。
そして、教室に入ってきたのは

スーツ姿の士郎だった。

「ええと、初めまして。

今日からこのクラスの副担任になった衛宮士郎です。
よろしく願います」

『
…』

士郎が自己紹介するとクラスメイト全員が静かになった。
全員が静かになったのが気になったのか、士郎は首を傾げた。
俺とエヴァはこの後何が起るのかわかっているため耳を塞いだ。

『
かつ…』

「
か？」

『
かつこいい！……！』

と大音量で言った。

俺はこの後、恐らくというか確実に俺と同じことになると思ったので心のなかで士郎に向かって同情しつつも。

この雰囲気楽しくて仕方がなかった。

夢の中（後書き）

原作突入はまだまだ先です。

この調子だとこれ、いつ終わるんだろう…

主人公のステータス（13話時点）（前書き）

神からのプレゼントが一通り出ましたので現時点でのステータスを出したいと思います。

主人公のステータス（13話時点）

棚町 京

年齢：（精神年齢 18歳）身体年齢14歳

性別：精神：男、身体：女

身長：166cm

元々は『ネギま!』の世界とは違う世界の人間。

しかし、病気により死んでしまったが、学校に行きたいという願いが神に届き、違う世界に転生することとなった。

自分を助けてくれた恩返し、そして心の底からクラスメイトを助きたいという思いから、転生された時に手に入った様々な能力を使って守ることを誓った。

神曰く、違う世界から来たため必然的に世界の修正力を相手にしないといけないため、能力を充分に扱えるように日々鍛錬している。

能力値

筋力：C

魔力：A+

耐久：C

幸運：D

敏捷：C

宝具：B+

スキル

注意!：『想像を力に変える程度の能力』よりスキルや能力を抜粋しているため、*fat e*にでるスキルだけでなく様々なアニメからの能力も含まれているのでご了承下さい。

直感：C

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。
ただ、ランクが低いため視界内限定で視界外の攻撃の予知はできない。

宗和の心得：C

同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。攻撃が見切られなくなる。

ただ、ランクが低いため二回目以降は若干見切られにくくなる程度になってしまう。

レールガン
超電磁砲：LV5 -

基本となる攻撃は速度と連射性に優れた直接電気を放出する電撃。
作中ではよく高圧電流の槍を投げつける「雷撃の槍」を使用しており、最大電圧は10億ボルト。

本物の落雷を呼び寄せる事もできる。
また、磁力を操作することもでき、周囲の鉄を含む金属を意のままに動せる。

さらに、地中の砂鉄を操って、表面を振動させて物体を切断し形状や長さが変化する「砂鉄の剣」や、津波のように地表を呑み込ませたり竜巻のように一気に巻き上げるといった攻撃も可能。
さらに、レールガンを放つこともできる。

コイン等を指で弾く形で撃ち出し音速の3倍以上で放つ。
空気との摩擦熱で溶けてしまったため射程距離は50m。

攻撃力は高く、弾道上にある物を全て薙ぎ払い、ビルに直径2mの風穴を開け衝撃波を撒き散らすほど。

なお、弾丸の質量を変えれば、威力や射程を伸ばすこともできる。
ただ、まだ使い慣れていないため、射程距離が50mから25mと半分になったり、最大電圧が3億ボルトと威力が減衰しているなど、若干弱くなっている。

神からのプレゼント

『想像を力に変える程度の能力』：B
その名前の通り、想像したことをそのまま自分の力にすることができる。

色々なアニメやゲームなどに出てくる能力や技は勿論、魔力や気などがあれば武器やアイテムも作ることができる。

ただし、人間が理解できない能力は使うことはできるが、回数制限や能力減衰といったマイナスが付く。

また、まだ使いこなせていないため（全部というわけではないが）想像したのを完璧に使うことはできない。

アイテムや武器も作ることができるが、ランクが高いのを作ろうとすると大幅に魔力や気を消費する上に、一時的にこの能力が使えなくなる。

（例：約束された勝利の剣エクスカリバーを作ろうとすると魔力と気すべてを消費し、一週間能力が使えなくなる）

『内包する世界（World entailing）』：A

『直死の魔眼』、『歪曲の魔眼』、『分裂の魔眼』、この三つの魔眼を一つにまとめた『魔眼』。

本来、三つ同時に使うことが出来るのだが、まだ理解出来ていないため同時に出来ても二つが限界。

また、二つ同時に発現すると能力が半減してしまい、更にそれぞれが持っているデメリットも同時に持ってしまう。

例外として、現時点で『直死の魔眼』は他の魔眼と同時に使うことは出来ない。

両目同時に展開出来るが任意に片目、両目と使い分けることも出来る。

以下がそれぞれの魔眼の能力。

『直死の魔眼』：A

「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。

これが読み取って視覚する「死」とは単なる生命活動の終了ではなく、意味や存在が発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”、「死期」や「存在限界」を意味し、「存在の寿命」そのものである。

直死の魔眼所有者にとって「死」は黒い線と点で視認され、強度を持たない。

この「死」を切ったり突くと、ありとあらゆるモノ（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。

「死の線」はモノの死に易いラインを表し、線をなぞり断てば本体が生きていようとその部分は「死亡」し、結果として対象はどんなに強靱であろうと切断される。

「死の点」は死の線の源でもあり、寿命そのもの。死の点を突けばそのモノの意味が死に至る。

ただ、まだ使い慣れていないため点を見ることはできず、またこの魔眼を使っている最中は魔法及び『想像を力に変える程度の能力』を使うことはできない。

『歪曲の魔眼』：B＋

視界内の任意の場所に回転軸を作り、対象の強度に関係なく“曲げる”ことができる眼。

元々は超能力と魔眼の間にあるもので正確には魔眼ではないのだが、神がこの能力を魔眼として作ったため魔眼に分類される。

右眼だけ展開すれば右に、左眼だけ展開すれば左に、両目展開すれば左右どちらにも曲げることができる。

ただ、まだ使い慣れていないため、この魔眼を使っている間は『想像を力に変える程度の能力』を使うことができない。

『分裂の魔眼』：B

視界内の任意の空間や物質、魔法等を裂くことができる眼。

左右どちらかだけ展開すれば3cm、両目展開すれば6cm裂くことができる。

ただ、まだ使い慣れていないため、この魔眼を使っている間は魔法を使うことができない。

『紅蓮』：？

現時点で能力は不明。

形状は例えるならDMC4のネロが使っていたレッドクイーンを真っ赤にした感じ。

? 已
解

? 始
解

主人公のステータス（13話時点）（後書き）

これを見て強っ！！と思った方。

すいません、ここからさらに強くなりますのでご了承ください…

指導員として 幼馴染として（前書き）

更新遅くなりまして、申し訳ございません。
文章を書くのに行き詰まっていました。
もっと本を読めばいいのに…

指導員として 幼馴染として

side 衛宮士郎

自分の授業時間を使った壮絶な質問が終わり、俺は今、広域指導員として学園内を歩いている。

と言っても、まだ学園内を把握できてないので、女子中等部周辺しか歩くことが出来ない。

ただ、一つ問題があるとすれば、俺はまだこの学園に来たばかりでまだ顔を覚えられていないため、ほとんどの生徒が俺を見てくる。視線が気になるので、迷うかもしれないけどちょっと遠くまで歩くことにした。

歩きながら、俺は今後のことを考えていた。

エヴァから聞いたこの世界の戦いは、広範囲の魔法を使った戦いらしい。

対魔力が低い俺にとって、かなり厳しい戦いになるのは考えるまでもない。

弓を使った遠距離での戦いならまだ大丈夫だとは思うが、近接戦闘で魔法を使われたら一溜まりもない。

ただ、近接戦闘に関しては、エヴァ並に最強クラスレベルの力はあるので、心配する必要はないらしい。

さすがに、覚醒状態の両儀さんとか、真祖の吸血鬼のアルクエイドさんとか、殺人貴とか相手にしてたから、近接戦闘は自信あった。今後の課題として、魔法の防御に関する対策を考える必要がある。と、対策を考えながら歩き回っていると、

前方で男性が四人で、女の子一人を囲むようにして絡んでいた。背中を向けているので、顔は見えないが、制服から判断して女子中

等部だとわかった。

状況的に、女の子に男性達がいらしているところだ。これは助けに行かなくてはと思ったそのとき、女の子の右隣の男性が手を出そうとしていた。

俺はその腕を掴むため、走った。
間に合うか？

「いいから、そのまま付いてくればいいんだよ!!」

そう言いながら、男性が女子中学生を掴もうとした腕を、俺は掴んだ。

「男が女の子相手に手を出すのは、さすがにだめでしょ」

「なつ、なんだお前は!!」

「え？」

「怪我はない？」

と、女の子に声をかけて見たら、

女の子の顔に見覚えがあった。

えつと、確か…

「大河内さん」

side 大河内アキラ

今日の放課後は、新しく来た衛宮先生を歓迎するために、歓迎会を開くことになった。

その準備のために、私は一人でお菓子の買出しに行くことになった。いつもは裕奈とまき絵と亜子のグループと一緒に行動しているから、そんなに警戒することはなかった。

というか、女子校エリアのちょっと端っこの店に買いに行くとはいえ、エリア内である以上、警戒する必要があると思っていた。だから、

「なあ、その君」

「え？」

まさか、男性から声をかけられるとは思わなかった。

しかも、四人に囲まれながら。

いつものメンバーで遊んでいるときに、声をかけられたことはあるけど、一人の時に声なんてかけられたことないから、どう対応すれ

ばいいかわからない。
どうしよう…

「今暇？暇なら一緒に遊ばない？」

「え、えっと…」

「大丈夫、悪いようにはしないからさ」

「一応、予定はあるんですけど…」

「ちょっと、ちょっと付き合うだけでいいからさ」

「いや、あの…」

と、私が返事に困っていると、男性たちの言動が段々荒っぽくなってきた。

「そんなに困る必要ないだろ？
付いてきたらいいんだって」

「なあ、別にいいだろ？」

「でも……」

そして、男性の一人が痺れを切らしたのか、

「いいから、そのまま付いてくればいいんだよ……！」

と、私の腕を掴もうとしてきた。
やばいと思ったその時、

「男が女の子相手に手を出すのは、さすがにだめでしょ」

後ろから、男の人がそう言いながら、男性の腕を掴んだ。

「なっ、なんだお前は……！」

「え？」

後ろからだったので、誰だろうと腕を掴んだ男の人を見るために、

顔を振り向いてみると、

副担任の衛宮先生だった。

「怪我はない？、大河内さん」

「は、はい。大丈夫です」

「それはよかった」

衛宮先生に、怪我はないことを報告すると、男性の腕を掴みながら安堵した。

「この野郎、離せ！」

と、腕を掴まれている男性は、衛宮先生の手を振り払おうとしたが、

「くっ！このっ！離せよ！」

衛宮先生の掴む力が強いのか、振り払えないでいた。

「この子の副担任である以上、自分の受け持つ生徒に危害を加えようとした奴の腕を掴むのは当然のことだろ？
なら、離すわけにはいかないね」

「てめえ！」

衛宮先生が腕を離さずにいると、一人の男性が衛宮先生に殴りかかった。

危ない、と思ったけど、

「危ないって」

と言いながら、空いている左手で殴ってきた男性の腕を掴んだ。

「なっ！！ってイテエー！！」

「ちよっ！！痛い痛い！！」

「はあ…、元気なのはいいけど、落ち着こつよ」

衛宮先生に腕を掴まれている二人は、絶叫しながら体をジタバタするぐらい痛がっている。

恐らく、衛宮先生の力が強いのだろう。
現に、何か軋む音が聞こえてくるくらいだし…

「で？どうする？」

一応、俺広域指導員だから、これ以上抵抗するとそれ相応の対処をしないといけないんだけど…」

「え？」

「広域指導員だと！？」

「あのデスメガネと同じ、広域指導員！」

衛宮先生が広域指導員だというのを、今初めて聞いた私は驚いた。
男性たちも皆驚いている。

広域指導員が全部合わせて何人いるかはわからない。

ただ、その中でも、麻帆良学園の中で一番有名なのが、デスメガネという名前で広がっている、高畑先生だ。

あまりの強さに、学園内で広まったあだ名らしい。

その広域指導員に、衛宮先生もなっているとは思わなかった。

「これ以上抵抗しないなら、このことは内密にしとくよ。
でも、まだするようなら…」

「ひっ――!!」

「わ、わかりました!!」

「もう二度としないか？」

「はい!!――しません!!」

「誓います!――しませんから、手を離してっ、痛い痛い!!」

「よし、ならいいよ」

衛宮先生がそう言いながら、手を離れた。

「ひ、ひい――!!」

「お、おい! 待てよ!」

「こんな奴がいるなんて聞いてねえよ――!!」

「うわあああ!!」

それぞれが声を挙げながら、走り去っていった。

「まったく…」

？どうしたの、大河内さん」

「あ、いえ、その、ありがとうございました」

一連の状況に驚いていた私は、衛宮先生の言葉で我に帰った。ちよつと焦ったけど、助けて貰ったので、なんとか礼を忘れずに言うことができた。

「大河内さんに怪我が無くてよかったよ。
まあ、偶然なんだけどね」

「衛宮先生は、どのような用事で？」

「今日は、副担任としての仕事は終わったから、広域指導員として、周りを歩いていたんだ」

「なるほど…」

「でね…申し訳ないんだけど…」

と、衛宮先生はほんとに申し訳なさそうな顔をして言ってきた。

「まだ、麻帆良に来たばかりだから、よくわからないんだよね。
広域指導員として、さすがに迷子になりましたは洒落にならない
と思うしさ…」

「確かにそうですね…」

「もし暇だったら、少しでいいから案内してもらえないかな？」

案内したいけど、衛宮先生の歓迎会のための買い物がないといけないし…

どうしよう…

そう考えていると、私の携帯が鳴った。
裕奈からだ。

「あ、ちょっと失礼します」

「どうぞ」

内容的に、衛宮先生の歓迎会のことだと思っから、衛宮先生に聞かれないよう小声で話す。

「はい、もしもし」

『もしもし、アキラ？
今、どこにいる？』

「歓迎会の買い物に向かう途中だけど」

『衛宮先生見なかった？
歓迎会に誘うために声かけようと思ったけど、職員室に居なくて
今、みんなで探しているところなんだ』

「今、近くにいますけど」

『え！ほんと！
じゃあ、そのまま教室まで連れてきて来れないかな？』

「買い物は？私、まだ何も買っていないけど…」

『買い物はほかの人に頼むからいいよ。』

とりあえず、連れてくることが重要だから。

あ、あと今準備してるから、遅めに連れてきてね。
頼んだよ！』

「あ、ちよつとっ」

電話が切れた…

どうしよう…

とりあえず、連れてくるのはいいけど、早く連れてきても準備が出来てないからまだいいって言ってたけど…

教室に連れていくための理由も考えないと。

「衛宮先生。

案内するのはいいですけど、そのあと教室まで来てもらえませんか？

教科書を忘れてしまったので、もって帰りたいんですけど…」

「いいよ。

どうせ、このあとの予定はないからね」

「ありがとうございます」

道のりとしては、目的地を教室として、少し遠回りしながら案内しようと思う。

ただ、細かく案内してると時間が掛かるので、最低限知っていたほうがいいお店等、簡単に案内した。

場所が女子校エリアなため、生徒が男性と一緒に歩いているのは、かなり目立つ。

ちよつと恥ずかしかったけど、けど、

少しだけ、役得だなって思った。

side 棚町 京

士郎のことだから、誰かに出会うとは思ってたけど、まさか大河内さんとは思わなかった。

教室に士郎を連れて来れるなら、誰でもいいけど。

歓迎会の準備で、俺に割り振られた仕事を終わらせた俺は、そう思っていた。

雪広さんの命令を、忠実に従うだけの簡単な仕事です。

仕事が終わったので、昨日無駄な戦いをしてまで約束させた奴の様子を見てみた。
すると、そこには

自分の仕事をしながら、拳動不審にちらちらと、木乃香を見ている不審者（刹那）がいた。

「はあ……」

あまりのひどさに、ため息を出してしまった。

事情を知らないクラスメイトは、いつもとは雰囲気が違う刹那に不審に思い。

事情を知っている龍宮は、刹那の様子を見て、声を出さないよう必死に笑いを堪えていた。

笑ってないで何とかしろよ、龍宮。

ちなみに、木乃香は明日菜と一緒に作業をしていて、刹那の様子に気付いていない。

この状況を改善するために、俺は刹那に近づいた。

「あなたは何をやっているのかしら、桜咲さん」

「い、いえ別に」

「約束で、木乃香と元の関係に戻って言ったけど、不審者になれ

とは言っていないわ」

「し、しかし…」

「はあ、刹那。ちょっと来なさい」

と言いながら、手招きをした。

「え？」

「いいから。来なさい」

何度も言つと、渋々とだが刹那は来てくれた。

「今から言つたことを実行しなさい。
まず…」

周りには聞こえないよう、小さい声で説明した。

「…え！？
いや、それはちょっと」

「約束、守りなさい」

「うっ。わかりました…」

そう言うと、刹那は緊張した様子で木乃香に近付いていった。
刹那が行動を起こしたのが不思議に思ったのか、龍宮が話しかけてきた。

「刹那に何を言ったんだい？」

「見ればわかるわ」

と、龍宮と話していると、刹那が木乃香に話しかけた。

「あ、あの、お嬢様」

「え？つてせつちゃんやん！
どないしたん？」

「あれ？桜咲さんだ。」

どうしたの？」

自分から話しかけても聞いてくれなかった刹那が、自分から訪ねてきたのがよっぽど嬉しかったのだろう。

嬉々とした表情で刹那に答えた。

明日菜も、あまり自分から話しかけないクラスメイトを不思議に思っているのか、少し驚いている。

「い、いえ、その…」

「？」

「お、お嬢様の、仕事のお手伝いを、してもいいでしょうか？」

「…うん！！ええよ！！一緒にしょ！」

というわけなんやけど、明日菜、ええよな？」

「え？まあ、別に問題ないけど」

「ほな、三人で一緒にしょ！」

木乃香はそう言いながら、花のような笑顔で三人で作業し始めた。
刹那の行動と木乃香の様子の変化に不思議に思ったのか、クラスメイトからどういふ関係なのか問いただされた。

「なるほど、そういうことが」

「こうでもしないと行動しないでしょ」

「で、刹那の分の仕事は棚町さんがやると」

「自分の仕事が終わったし、暇だしね。」

あと、こうでもしないと、あいつ行動しないしね」

「まあ、一理あるね」

と、龍宮と話していると、ちょうど雪広さんが騒ぎを収めたていた。
しばらくして、みんなだいたい作業が終わるのと同時に、大河内さんが明石さんに電話してきた。

「みんな！あと少して到着だつて！」

「皆さん、準備はよろしいですね」

と、雪広さんが言うのと同時に、大河内さんと土郎が入ってきた。

『ようこそー！衛宮先生ー！』

「…？」

主役である土郎は、どういう状況なのかわかっていないようだ。

「これは、衛宮先生の歓迎会ですわ」

「歓迎会、にしてはすごいことになってるけど」

「新しく赴任してきた先生を祝うのは当然のことですわ」

「…」

雪広さんの話を聞いて、土郎は呆然とした。

「衛宮先生？どうなされました？」

「……いや、まさかこんな盛大な歓迎会を俺なんかのために開いてくれるとは、思ってたなくてね

嬉しいよ。ありがとう、みんな」

女子校ということもあって、男性から、しかも笑顔で感謝の言葉をあまり言われ慣れていないのだろう。
俺以外のほぼ全員が顔を赤らめた。

その後はそんな大きな騒ぎもなく、俺の時と同じように歓迎会は進んだ。

ただ、衛宮先生と一緒に行動していた大河内さんは、みんなから質問攻めをされていたけどね。

楽しかった歓迎会も終わり、片付けも終わり、俺はエヴァの家に帰って休んだ。

「楽しかったけど、疲れたわ」

「お疲れ」

「士郎はどうだった？」

「ああ、とても楽しかったよ」

「そうか」

「そう、それを聞いて安心したわ」

主役が楽しいと思えるのなら、それで充分だ。
エヴァも私と同じことを思っているのだろう。

「さて、このあとは修行かしら？」

「そうだな、少し休んだらそうしよう」

「じゃあ、先に晩ご飯でも食べるか」

「手伝います」

「いいわね」

「そのほうがいいだろう」

と、茶々丸と士郎が台所に向かおうとした、その時

「「「ん？」「」」

俺と士郎とエヴァが、同時に声を挙げた。

「なあ、エヴァ。

これって」

「ああ、恐らく侵入者だ。

先程から、物凄く弱い気配が沢山でていたが、私が出るほどではないと思ったから無視していたんだが…」

「ああ、また新たな侵入者がでた。

しかも、一回目よりかなり強い」

「二回？私は一回しか感じなかったけど…」

士郎とエヴァは、二回と言っているが、俺は今さっきでた気配しか

わからなかった。
いきなり感じた気配に、俺たちで考えていると、
電話が鳴った。

「恐らくジジイからだな」

「私が出るわ」

俺は、エヴァに言いながら電話をとった。

「もしもし、棚町ですが」

『おお、棚町くんか！
緊急事態じゃ！』

「どうなさいました？」

『恐らく、西の者が召喚したであろう妖怪が、二方向からの時間差
による侵入ということが起きたんじゃない』

「時間差…つまり、一回目の侵入は罠で、今さっきのが本命と」

『そうじゃ。それで、一回目に教師を出してしまつて、二回目のは生徒で対処することになったのじゃ。』

しかも、最初に侵入してきた妖怪は、力は弱いが、如何せん数が多くてのう…』

「救援に行けないと」

『そうじゃ。』

それで、すまんが棚町君と衛宮君で、救援に行ってもらいたいのじゃが』

「わかりました。

今すぐ向かいます」

『ありがたい。

よろしく頼む』

「失礼します」

「やはり、侵入者か？」

「西の召喚による妖怪の時間差攻撃らしいわ。

一回目に主力の先生達を出してしまつて、本命の二回目は生徒でどうにかするしかなくなつたつて言つてたわ」

「なるほど、で、士郎と京が行くのか？」

「ええ、学園長に頼まれたわ」

「頼まれなくても、俺は行くけどね」

「さすがね」

そついうと、士郎はすぐさま戦闘準備を始めた。

準備と言っても、この世界に來た時の服に着替えるだけだけど。

私は、まだ戦闘用の服を作つてないから、適当に動きやすい服に着替えた。

着替え終わつて外に出ると、そこには赤い外套を身に纏つた士郎と、見送りに來たエヴァ、その後ろに控える茶々丸と、茶々丸の頭の上にチャチャゼロがいた。

「準備は万全か？」

「俺は、武器はいつでも出せるから大丈夫」

「私もよ」

「ならいい。」

士郎は心配する必要は全くないが、京は初の実戦だからな。
気をつけるよ」

「大丈夫よ。」

エヴァに鍛えられたのだから」

「ふふ、そうか」

さて、今すぐに救援に行かないといけないから、急がないと。

「さて、そろそろ行きましょう」

「ああ、それじゃ、行ってくる」

「行ってこい」

「お体に気を付けて」

「サツサトイッテコイ」

三人の言葉を聞いて、俺と土郎は救援場所に最大速で向かった。

s i d e エヴァ

行っただか。

「さて、二人が帰ってくるまで酒でも飲んで待っていていよう」

「オ、イイネエ。」

「サスガゴシユジン」

「京さん、大丈夫でしょうか？」

茶々丸が心配そうに私に聞いてきた。

「さっきも言ったが、心配する必要はない。
確かに強い気配はするが、今の京でも充分倒せる」

「…わかりました」

さて、どのようにして倒すのか。
楽しみだ。

指導員として 幼馴染として（後書き）

次回は戦闘です。

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845j/>

オリ主と剣製の麻帆良日記

2011年11月16日13時37分発行